

**平成18年度**

**学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い**

**実 施 報 告**

## はじめに

独立行政法人日本学生支援機構は、学生支援を先導する中核機関として、奨学金貸与事業や留学生支援事業及び学生生活支援事業を総合的に実施し、次代の社会を担う豊かな人間性を備えた創造的な人材を育成するとともに、国際理解・交流の推進を図ることを目指しております。

さて、学生ボランティア活動については、阪神・淡路大震災を契機として社会の注目を集め、各大学等においても、正課教育への取組みや学生ボランティアセンターの設置など、近年急速な高まりをみせております。また中央教育審議会から平成14年7月に「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の答申があり、今日の青少年をめぐる様々な問題を解く糸口として「奉仕活動・体験活動」を奨励・支援することの重要性が説かれ、大学等を含め、社会全体で推進していただくための仕組みや社会的気運の醸成の必要性が提言されています。

こうした状況の中にあって、日本学生支援機構は、学生ボランティア活動支援事業の一環として、全国の大学等の学生ボランティア活動支援担当教職員・ボランティア関係団体及び学生等の参加による「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」を実施し、また、日本学生支援機構の全国12支部・事務所を活用し、各地域の大学等及び関係団体と連携を図り、「体験ボランティア・学生ボランティア活動セミナー」を実施いたしました。

本報告書が大学等及び地域社会における学生ボランティア活動を支援・推進するための参考資料になれば幸いに存じます。

末尾ながら、本事業を推進するにあたって、ご多忙にもかかわらず様々な形でご協力いただきました関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

平成19年3月

独立行政法人 日本学生支援機構

# 目次

## はじめに

### I 平成18年度「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」実施報告

開催概要	1
プログラム	2
開会・挨拶	4
第1部 全体会	
講演 「文部科学省におけるボランティア活動の推進について」	5
パネルディスカッション「『学生が主役』のボランティア活動をサポートする」	13
第2部 分科会	
第1分科会 「学生部職員のためのボランティア入門」	30
第2分科会 「ボランティアセンターのつくりかた」	32
第3分科会 「実践的ボランティアコーディネーション術」	34
第4分科会 「大学の授業におけるボランティア体験学習の可能性」	36
第5分科会 「学生が結ぶボランティアネットワーク」	38
参加者アンケート	
集計結果 総括表	40
アンケート様式	44
参加者内訳	46
参加大学・機関等一覧	47

### II 平成18年度「体験ボランティア・学生ボランティア活動セミナー」実施報告

体験ボランティア・学生ボランティア活動セミナー実施一覧	49
各支部・事務所の実施報告書・協力団体実施所見書	
北海道支部	51
東北支部	55
関東甲信越支部	59
北陸支部	63
東海支部	67
京都支部	71
大阪支部・神戸事務所（合同実施）	76
中国支部	80
四国支部	83
九州支部	91
大分事務所	94
参加者アンケート	
実施全支部・事務所の集計結果 総括表	98
アンケート様式	101

# 開催概要

---

## ◆ 趣 旨

今、大学等において、学生が行うボランティア活動等を積極的に奨励するため、正規の教育活動として、学内外における社会体験・地域活動を視野に入れた取組みが社会的にも注目されています。また、さまざまな場において、大学等とボランティア関係団体との情報交換や緊密な連携・協力が強く望まれています。

このような状況を踏まえ、大学と関係機関・団体の担当者間の連携・協力をさらに推進するために、それぞれの具体的な取組み事例や課題等についての情報や意見交換等を行います。

## ◆ 主 催

独立行政法人 日本学生支援機構

## ◆ 協 力

文部科学省

## ◆ 日 時

平成18年12月8日（金） 10:30～17:00

## ◆ 会 場

東京国際交流館 プラザ平成（お台場）

東京都江東区青海 2-79 TEL: 03-5520-6001

## ◆ 対 象

全国の大学・短期大学及び高等専門学校のボランティア活動支援業務担当教職員、ボランティア関係機関、団体担当者及び学生

## ◆ 企画実行委員会委員

興 梶 寛 社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事長

栗 田 充 治 亜細亜大学国際関係学部 教授

渥 美 公 秀 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 助教授

小 抜 隆 東北福祉大学ボランティアセンター コーディネーター

富 江 伸 治 独立行政法人日本学生支援機構 客員研究員

和 氣 太 司 独立行政法人日本学生支援機構 学生生活部長

# プログラム

---

## ◆ 開 会 10:30

☆ 挨拶 独立行政法人 日本学生支援機構 参与 大貫賢一

☆ オリエンテーション

## ◆ 第1部 全体会 10:40

☆ 講演 「文部科学省におけるボランティア活動の推進について」

出口寿久 文部科学省生涯学習政策局社会教育課ボランティア活動推進専門官

☆ パネルディスカッション 11:00~12:30

「『学生が主役』のボランティア活動をサポートする」

学生のボランティア活動が、社会への貢献及びそれを通じての教育的効果などが期待され、多くの大学で奨励されるようになってきました。学生のボランティア活動をより主体的で活発なものとし、有効に活かしていくために、大学等はどのような支援が求められるのか、実践を踏まえた中から課題や在り様を探ります。

司 会 : 富江伸治 (筑波大学名誉教授・日本学生支援機構客員研究員)

パネリスト : 村山史世 (麻布大学環境保健学部環境政策学科地域環境研究室 講師)

足立陽子 (立命館大学ボランティアセンター ボランティアコーディネーター)

宮本 匠 (大阪大学人間科学部 ボランティア人間科学講座4年生)

— 昼 食 — 12:30~13:30

## ◆ 第2部 分科会 13:30~17:00

第1分科会 「学生部職員のためのボランティア入門」

コーディネーター 興 梶 寛 社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事長

ボランティア活動は、学生が活動をとおして、自己や社会、そしてより深い学びと出会うための限りない教育力を秘めています。また、大学とコミュニティを「必要としあう」双方向の関係に結び社会に活力をもたらします。「入門編」分科会をとおして、大学はなぜボランティアに取り組むのかについて探ります。

## 第2分科会 「ボランティアセンターのつくりかた」

コーディネーター 村田 素子 聖心女子大学 学生部マグダレナ・ソフィアセンター

学生の社会参加と学びを深めるために、ボランティアセンターはどのような機能・役割を担い、どんな運営をすればよいのでしょうか。「これから設置する」、「いままさに運営している」という皆さんと一緒に意見・情報交換をとおして魅力的なボランティアセンターづくりについて考えます。

## 第3分科会 「実践的ボランティアコーディネーション術」

コーディネーター 小 抜 隆 東北福祉大学 ボランティアセンター コーディネーター

ボランティアコーディネーターとは？ コーディネーションって？ 学生・地域のボランティアニーズに応えるために私たちは何ができるでしょうか。本分科会では事例報告や意見交換などをとおしてよりよい支援について一緒に考えます。

## 第4分科会 「大学の授業におけるボランティア体験学習の可能性」

コーディネーター 栗田 充治 亜細亜大学 国際関係学部 教授

ボランティア活動をはじめ、大学の地域連携・社会貢献の取り組みが盛んになっていますが、大学におけるボランティア推進は教育と切り離せません。ボランティア関連科目の運営事例や、一般授業の中でボランティアに結びつける体験学習の試み等を取り上げ、大学の教育活動の新しい展開の方向を探ります。

## 第5分科会 「学生が結ぶボランティアネットワーク」

コーディネーター 宮本 匠 大阪大学 人間科学部ボランティア人間科学講座 4年生

学生による、学生のための分科会です。ボランティア活動を進める上での悩みや工夫、ぶつかっている壁や将来の展望等について、学生の目線で語り合います。大学間のネットワークづくりのきっかけとなる分科会です。参加される方はできるだけ実践事例をご用意ください。

## 開会 挨拶

独立行政法人 日本学生支援機構参与 大貫 賢一

皆さま、おはようございます。ただいまご紹介にあずかりました日本学生支援機構参与の大貫でございます。本日のこの集いを開会するにあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。本日は全国各地から多数ご参集いただきまして誠にありがとうございます。また文部科学省生涯学習政策局社会教育課の出口ボランティア活動推進専門官、さらに各パネリスト、分科会のコーディネーターの先生方には、大変お忙しい中ご出席、ご協力をいただきましてありがとうございます。



日本学生支援機構は平成16年4月に発足以来、奨学金貸与事業、留学生支援事業、そして学生生活支援事業を通じ、次世代の社会を担う豊かな人材を育成するという目標のもとに、各種事業を進めております。今後とも引き続き日本学生支援機構の事業へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

さて、学生ボランティア活動につきましては、皆さまよくご存知のように、阪神淡路大震災を契機といたしまして、地域社会における学生自身のボランティア意識が急速に高まってまいりました。2年前の中越地震に際しましても、学生のボランティア活動はさまざまな分野、方法で展開されたところでございます。このような活動の積み重ねの結果、学生のボランティア活動は、地域社会からますます期待されるものとなっております。

一方、これからの大学等におきましては、一層の地域貢献を推進していく必要があると指摘されております。学生ボランティアはまさに地域と密着した活動であります。まず学生にボランティア活動のきっかけを与え、裾野を広げていくことが大切であると考えております。学生ボランティア活動を、受け入れ機関やボランティア団体、そして地域の行政機関等と緊密に連携を取り合いながら、支援、促進していくことは重要な課題であると認識しております。

また、最近の動向といたしましては、本年10月に内閣に設置されました教育再生会議におきましても、ボランティア活動の推進が検討事項の一つに掲げられており、委員の先生方による議論が始まっているところでもあります。

本日の分科会におきましては各テーマの中で、それぞれの事例紹介、情報交換、そして意見交換をしていただくことにより、さまざまな課題の解決に寄与できれば幸いであると考えております。最後になりましたが、この集いの開催に当たりまして準備などに多大なご協力をいただきました企画実行委員会の先生方に、厚く御礼を申し上げます。本日の集いが、ご出席の皆さまにとって実りあるものとなりますように祈念いたしまして、開会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

## 第1部 全体会

### 講演

#### 「文部科学省におけるボランティア活動の推進について」

文部科学省 生涯学習政策局社会教育課

ボランティア活動推進専門官 出口 寿久 氏

おはようございます。ご紹介いただきました文部科学省の出口と申します。本日は貴重な時間をいただきまして、説明させていただけることに感謝申し上げます。今日は資料を用意させていただいておりますので、パワーポイントでお示ししながら、話をさせていただきますが、そちらもご覧いただきたいと思っております。



今日、お集まりの皆さんは学生のボランティアに関わっておられる方々でございますので、本来は高等教育局からお話しすべきところだと思いますが、ボランティアに関しましては、省内の取りまとめを私ども生涯学習政策局でやっているものですから、私の方から説明させていただきます。

今日は、まず、これまでのボランティア活動についての経緯、背景、それから文部科学省における取り組み、最後にボランティア活動を取り巻く動向という順序でお話をさせて頂きたいと思えます。

そもそも、皆さんご存知の通りボランティア活動は多岐にわたっております。よって、その関係省庁も多く省庁にわたっておりまして、福祉でありましたら厚生労働省、国際協力でありましたら外務省、交通安全とか観光でありましたら国土交通省、防犯であれば警察庁など多岐にわたっております。文部科学省では学校教育とか、社会教育の場におけるボランティアということになっておりまして、児童生徒であるとか地域住民の方々がボランティア活動を理解し、関心を持つきっかけづくりに努めているところでございます。大学等における単位認定もきっかけづくりのひとつといえるのではないかと思います。これから説明させていただきます資料の多くでは奉仕活動・体験活動という言葉を使っております。どちらかというとも大学というよりも小・中・高であるとか、地域住民を対象としているということがございまして、そういう言葉を使っているということをご理解いただきたいと思っております。

まず、これまでの経緯でございます。もう皆さんすでにご存知のことだと思いますが、教育改革国民会議は2000年(平成12年)3月に小渕内閣の下に設置されまして、その後、

森内閣、2001年まで開催されております。その最終報告におきまして、17項目の提言がなされております。その一つとして人間性豊かな日本人の育成、奉仕活動について提言されています。時代背景といたしましては、平成12年の愛知県豊川市における17歳の少年による主婦の殺人事件であるとか、佐賀県の高校生による西鉄バスジャック事件など青少年の凶悪事件の多発などがありまして、これを受けて教育改革国民会議で議論されて、奉仕活動を全員行なうようにするという勧告がなされたところでございます。翌平成13年度に文部科学省では教育改革国民会議の最終報告の提言を十分に踏まえ、各般にわたる必要な取り組みを行なうということで教育改革のための具体的な施策や課題を「21世紀教育新生プラン」ということで取りまとめております。この新生プランは、新生日本の実現を目指し、国政の最重要課題の一つに位置付けられる教育改革の、今後の取り組みの全体像を示すものとして、学校が良くなる、教育が変わるための具体的な政策や課題と、これらを実行するための具体的なスケジュールというものを明らかにしたものでございます。これを受けまして学校教育法、社会教育法が平成13年7月に改正、施行されております。改正のポイントとしては二点ありまして、青少年のボランティア活動など社会奉仕体験活動等の充実を図るために事業の実施、奨励の事務を教育委員会で行なうということを明記しているというのと、社会教育と学校教育の連携の確保ということがあります。平成14年7月には中央教育審議会から「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策について」答申がなされております。答申の中では奉仕活動・体験活動は、個人や社会にとって、どのような意味を持ち、社会においてなぜ推進する必要があるのか、奉仕活動・体験活動の範囲をどのように捉えるかなどについて整理をいたしまして、その上で初等・中等教育段階までの青少年、18歳以降の青年や勤労者等の個人の奉仕活動・体験活動の奨励のための方策であるとか、奉仕活動・体験活動を社会全体で推進していくための社会的仕組みの在り方、社会的機運を醸成していくということについて提言がなされております。これを踏まえまして文部科学省では学校教育、社会教育におきましてボランティア活動を推進するために様々な施策を実施してきております。詳細については、この後、学校教育、社会教育の取り組みの中でご紹介させていただきたいと思っております。

いま申し上げた平成14年の中央教育審議会の答申では、学生に対する奨励支援策として、大学等において、正規の教育活動として位置付けるために、ボランティア講座、サービスマニエラ科目やNPOに関する科目の設置、学生の自主的な活動の単位認定、それから学生の自主的な活動に対する奨励支援策として、学生に対する支援体制の充実、学生が活動を行ないやすい環境整備、そして Semester 制度やボランティア休学制度の導入、大学そのものが活動の場となりうる要素を備えていることから学内でのボランティア活動の機会の積極的提供ということについて提言されているところでございます。

次に文部科学省における奉仕活動・体験活動の推進に関する主要な施策、これは平成19年度、来年度の概算要求で挙げているものでございます。主要なものとなりますように文部科学省における奉仕活動・体験活動の推進に関する施策の中の主なものの抜粋でございます。学校教育から社会教育、青少年から成人一般にわたっております。こちらの資料に

については後ほど、ご覧いただきたいと思ひます。

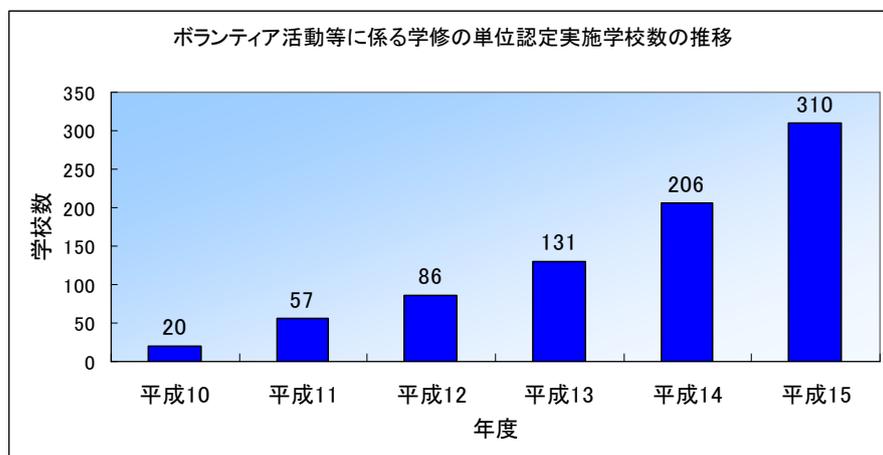
次に学校教育における取り組みでござひますが、一つは先ほど学校教育法、社会教育法の改正でも少し触れましたように、小・中学校における奉仕体験活動の充実、二点目として高等学校における単位化というものがござひます。

学習指導要領における位置付けでござひますが、学校教育におけるボランティア活動の推進は、小・中学校の学習指導要領、高等学校の学習指導要領に規定されております。ここに示してありますのは、学習指導要領の一部、教育課程編成の一般方針と指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項でござひますが、この他に総合的な学習の時間の取り扱い、道徳、特別活動の中でのボランティア活動など、社会奉仕の精神を涵養する体験活動の実施について規定しているところでござひます。

それでは、実際の実施状況についてデータを紹介させていただきたいと思ひます。学校における体験活動の実施状況ですが、数字は小学校の場合は5年生、中学校、高等学校では2年生の1年間で実施する体験活動の総時間の平均を挙げてあります。小学校では自然体験活動であるとか、職業体験活動が活動の中で大きなウェイトを占めてあります。ボランティアなどの社会奉仕に関わる体験活動は、中学校、高等学校で全体の単位時間に占める割合が大きくなっています。

高等学校におけるボランティア活動にかかる学習の単位認定についてですが、小・中学校に比べて高等学校における体験活動の中で、ボランティア活動が占める割合が大きいと先ほど申し上げましたが、高等学校では校外で行なわれたボランティア活動を校長の判断によりまして、当該高等学校の教科、科目の履修と見なして単位を与えることができる

というような制度改正を平成10年4月に行なっております。ここに示してありますグラフは、高等学校におけるボランティアの単位認定の状況でござひます

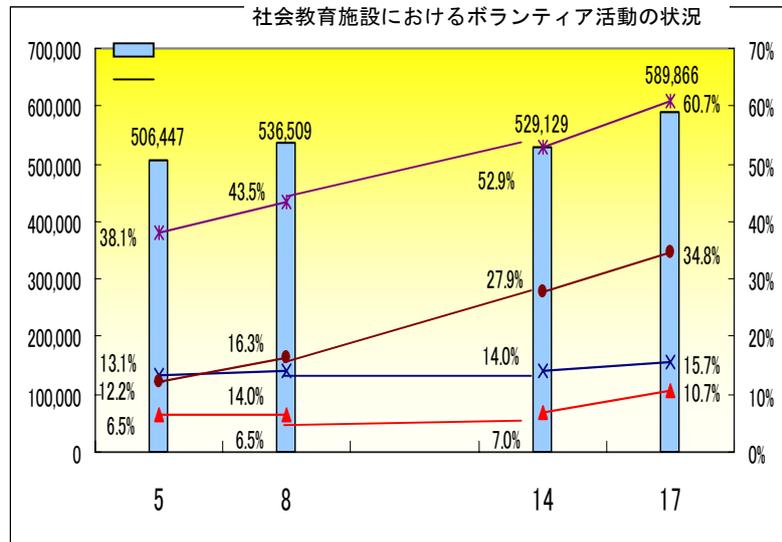


が、ボランティア活動を単位認定する学校数は年々増加しているところでござひます。特に平成13年度以降の伸びというのが顕著なものといえると思ひます。

参考までにご紹介させていただきますが、岡山県瀬戸内市に邑久町公民館がござひます。その邑久町公民館は邑久高等学校と連携いたしまして、公民館主催事業に参加したボランティアに対する単位制の導入というような仕組みづくりを進めてあります。また、皆さんご存知の通り、東京都では来年度(平成19年度)から都立高校において奉仕活動を必修化するという動きがあるなど、今後全国各地で各自の取り組みが進められるということにな

ろうかと思えます。

続きまして社会教育における取り組みでございます。公民館、図書館、博物館といった社会教育施設におけるボランティア活動の状況でございます。ちょっと細かい資料で申し訳ございませんが、社会教育施設は人々の学習の成果を、地域で活動したいと希望する人に対する活躍の場ということで期待されておるところでございます、その役割を果していかなければならないということ



で中教審の答申でも提言されているところでございます。

日本におけるボランティア人口は、先ほど参与のご挨拶にもありましたが、平成 7 年 1 月の阪神淡路大震災を一つの契機といたしまして、大きく増加してきております。平成 5 年から 14 年の増加と比較いたしましても、14 年から 17 年については大きく増加しているところでございます。社会教育施設におけるボランティアの登録制度を持っているという施設は年々増加傾向にございまして、施設別に見ますと特に図書館が多いということです。

私ども、文部科学省社会教育課では、現在、ボランティア活動の全国展開ということで大きく二つの事業を実施しております。ひとつは、ボランティア活動に対する広報啓発・普及事業ということで国民の関心を高めるために、フォーラムの開催であるとか、広報資料の作成などを行なっております。その次でございますが、「地域ボランティア活動推進事業」ということで、高校生対象の事業と市町村ぐるみの事業という二つの事業を設けておりまして、これは国民ひとりひとりが、ごく自然に日常的にボランティア活動を行なって、相互に支えあうような地域社会の実現を目指して、地域におけるボランティア活動の全国展開を推進するものでございます。地域の実情に応じまして様々なボランティア活動に取り組む事業を実施しております。高校生対象事業は主たる対象を高校生に限定しておりますが、市町村ぐるみの事業については子供から高齢者まで対象としておりまして大学生も参加できるということになっております。平成 17 年度、昨年度でございますが全国で約 3000 人の大学生に参加していただいているところでございます。それから、「支援センターの機能の充実」ということでございまして、文部科学省では平成 14 年度から 16 年度に地域における奉仕体験活動の推進を図るということを目的に、都道府県・市区町村の体制の整備を行なっているところでございます。その一つとして体験活動・ボランティア活動推進センターの設置ということを行なっております。これらを地域の大学であるとか、企業、NPO であるとか、ボランティア団体と連携協力を図りながら行政が設置運営主体であつ

たものを民間へ機能を引き継ぐ方針を検討するための事業を実施しているところでございます。

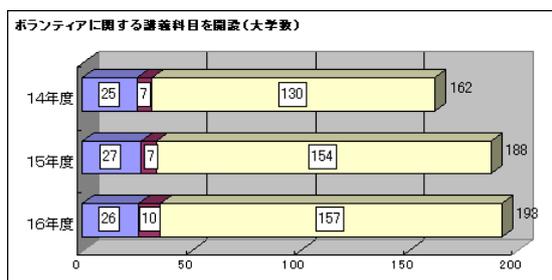
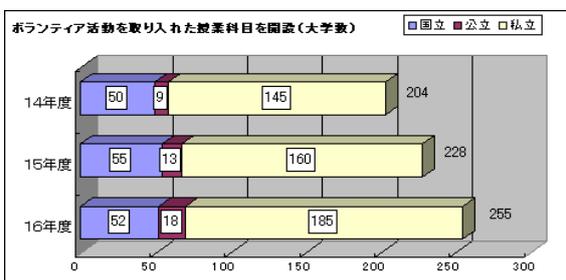
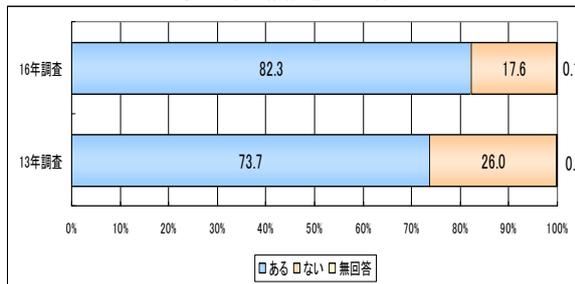
この事業の具体的な取り組み例を、ここで紹介させていただきたいと思います。この事業では福祉から環境、防犯であるとか社会教育施設の支援など、実に多彩な分野のプログラムが展開されております。今年度の場合ですと 620 事業が行なわれております。また、広報啓発活動としてボランティア・フォーラムというのも全国 7ヶ所で実施しているところでございます。昨今、子供が被害者、加害者となる事件の多発によりまして、地域防犯に対する住民の意識が非常に高まっているところでございます。そこで 18 年度は「防犯」をキーワードに、防犯ボランティアの取り組みを支えながら、地域におけるボランティア活動について考えるフォーラムを開催しているところでございます。データは示しておりませんが、警察庁が行なっている自主防犯活動を行なう防犯ボランティアの活動状況では、団体数であるとか活動人数についても今年度は昨年度に比べると団体数でも 1.3 倍、約 26000 団体。構成員は 1.4 倍、165 万人となっております。この防犯ボランティア活動の最近の動向として、関係する大学の方はご存知だと思いますが、学生のボランティアグループが地域の小学校の防犯ボランティアをかってでて、サークルを作っているというのが全国各地でも動きがあるようでございます。地域社会が抱える問題とボランティア活動の関係の一つでございます。ご存知の通り、日本は少子高齢化が急激に進展しております。グラフに示されるとおり高齢者人口は年々増加しております。さらに一人暮らしの高齢者の割合も増加の一途をたどっているところでございます。一人暮らしの老人を取り巻く問題は様々でございます。その一例でございますが、平成 18 年、今年の冬は豪雪被害が顕著でございました。ここに示していますとおり雪下ろし等の除雪作業中の事故で亡くなった方は、実に 112 名という数字になっております。そのうち 7 割が 65 歳以上の高齢者でございました。そういったこともありまして、一人暮らしの老人等を訪問して話し相手をしたり、簡単な家事を手伝ったりするなどの訪問ボランティアであるとか、雪かきボランティアといった活動が展開されております。独居老人の場合は孤独死の問題もございまして、訪問ボランティアでは安否確認も兼ねた活動になっております。皆さまご存知だと思いますが NHK の「ご近所の底力」という番組がございまして、そこで紹介されている事例も、地域の課題と関連したボランティア活動の一つと言えるのではないかと考えております。

次に大学におけるボランティア活動でございますが、ここで示させていただくデータについては、日本学生支援機構が実施された調査報告書によるものでございます。大学におけるボランティア活動の支援の一つといたしまして、活動に関する相談窓口の設置というものがございまして、これは先程ご紹介した中教審の答申におきましても、提言があったところでございます。調査によりまして、相談窓口を設置する大学の割合は増加しております。約 8 割の大学で窓口が置かれております。その意味ではボランティア活動に対する大学の支援体制というものが整備されてきているといえると思います。

ただし、担当部署の状況について見た場合は、専任の部署であるとか、専任の担当者がいる大学というのは僅かでございます。ほとんどの大学では他の業務と兼任という状況でございます。本日、参加されている方の中にも大学の担当者も多くおられることと思いますが、ほとんど他の学生系とか学務系の業務と兼務されているという状況ではないかと思えます。

大学におけるボランティア活動を取り入れた授業科目の開設状況でございますが、授業科目や講義科目を開設している大学も増加傾向にございます。

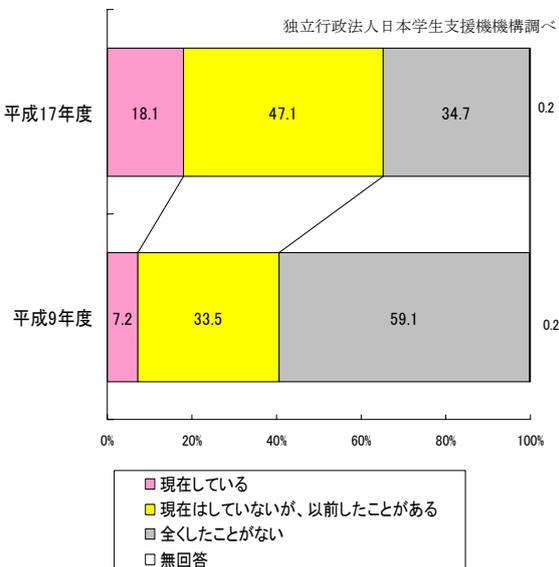
学内向け相談窓口の有無



大学生がどの程度ボランティア活動を行なっているかというデータでございますが、経験したことがあるという大学生は平成9年度と17年度を比較した場合に増加しております。

特に「現在している」というのが2.5倍に膨らんでおります。活動内容では子供たちへのスポーツ、レクリエーションなどの指導、自然環境保護活動であるとか、高齢者や障害者の支援、国内の災害地での支援活動が多くなっております。これは参考でございますが、諸外国の状況ということで、これは学生ボランティア活動の一例でございます。イギリスの制度でございますが、もう皆さんご存知だと思いますので説明を省かせていただきますが、大学合格者に占めるギャップイヤーの学生は約1割弱ということになっております。

「ボランティア活動」経験



次に最近のボランティア活動を取り巻く動向でございます。先ほど参与の方からも話がございましたが、新聞情報では9月入学であるとか、入学前のボランティア活動の義務化ということについて安倍総理の見解として伝えられておりますが、実は公式の場ではまだ総理は発言されておられません。唯一、安倍総理が就任前に発刊された「美しい国へ」という本の中で触れられておまして、若者がボランティア活動を通じて人と人の繋がりの大切さを学ぶことを指摘しておまして、

若者のボランティア活動の充実といたしまして、大学入学の条件にボランティア活動を義務付けるということを提言しております。それから教育再生会議の第 1 回の会合の挨拶でも総理は奉仕活動によって人間性や社会性を磨くことの必要性ということについて触れておられるところがございます。教育再生会議でございますが、本年 10 月 10 日閣議決定により内閣に設置されております。10 月から今日まで 3 回開催されております。この会議は非公開でございますが、会議資料であるとか議事概要については官邸のホームページで公表されておりますので、ぜひそちらのほうもご覧いただきたいと思っております。すでにもうご存知だと思いますが、この会議は有識者 17 名によって構成されており、3 つの分科会が設けられております。ボランティア活動、特に大学の 9 月入学と絡めた内容については、まだ具体的な議論はなされておられません、ここでいいます第 2 分科会「規範意識・家族・地域教育再生分科会」と第 3 分科会「教育再生分科会」が関係してくると思われま。第 2 分科会でございますが、ここでは規範意識や情操を身に付けた美しい人づくりのための方策について検討を行なっております、検討課題として、資料にありますように、心の教育、伝統文化の教育、それから規範意識、体験活動であるとか読書であるとかということについて、触れられる予定でございます。第 3 分科会でございますが、これは先ほどから申し上げている二つの分科会よりも大きな問題について議論をしようということになっておまして、9 月入学についてとか、奉仕活動の義務化についてはこの分科会で議論されることが予想されます。それから昨今のいじめ問題への対応といたしまして、緊急提言がこの教育再生会議の有識者の皆さんから出されております。この中でもいじめや問題を起す子供への対応策として社会奉仕というものが例示で挙げられているところがございます。それから教育再生会議がらみでございますが、今日の新聞に載っております、先ほど申し上げたように、まだ本格的な議論はなされていないところがございますが、今週末に教育再生会議の第 3 分科会で泊り込みの議論をする予定ということで、その中で 9 月入学であるとか高校卒業から半年間のボランティア活動や体験活動、教科の復習などの期間に活用するというようなことについて議論されるということになっております。

教育再生会議につきましては、ぜひ注目いただきまして動向を見守っていただきたいと思っております。今後、教育再生会議がどう動くかというのは私どもも、なかなか見えないところがございますが、ある程度の方向性が出されると思います。その動向を踏まえまして、内容によって、今後どう文部科学省として取り組んでいくのか考えていかなければいけないと思っております。義務化になりますと、これまで以上に受け入れる体制というのが重要になると思います。人数もそうですが、いろいろ整理していかなければいけないことはたくさんあると思います。受け入れる側の意識を高めるということも大事であろうかと思っております。

いろいろとご説明させていただきましたが、最後にいくつかお願い申し上げたいと思います。大学において、学生の皆さんが地域におけるボランティア活動に興味、関心を持って積極的に活動して参加していただくということはもちろんですが、先生方におかれても地域のボランティア活動の指導者であるとか助言者としての活動もぜひお願いしたいと思

います。また、学生支援センター等の先生方や事務の方々におきましては、学生の支援はもちろんのこと、広く様々な行政機関やNPOなどと連携して、ボランティア活動の輪を広げていただきたいと思います。

昨年内閣府が行なった世論調査によりますと、ボランティア活動に参加してみたいかという問いに対して15歳から19歳の人のうち72%、20歳から29歳までの60%の方が参加してみたいと回答しておられます。ここにお集まりの各大学の学生さんの6割以上がボランティア活動に取り組んでみたいと思っているということになります。ひとりでも多くの学生にボランティア活動に取り組むきっかけを作っていただきたいと思います。

(参考)「年齢別の参加希望」

年 齢	(%)
15 ～ 19 歳	<u>72.7</u>
20 ～ 29 歳	60.1
30 ～ 39 歳	63.9
40 ～ 49 歳	<u>71.9</u>
50 ～ 59 歳	<u>69.0</u>
60 ～ 69 歳	58.5
70 歳 以 上	33.3

「生涯学習に関する世論調査」(内閣府)

また、奨励していただくに当たり、各大学の予算も大変厳しい状況であると思いますが、例えばお金のかからないこと、単位認定を行なうとか、学長の表彰状を出すとか、こういった形で何らかのインセンティブを与えるということも、一つの方策ではないかと思っております。今後もボランティア活動の普及、振興にご尽力いただきたいと思います。

最後にここに情報提供ということで、ホームページのアドレス等挙げております。それから私どもで国立教育政策研究所社会教育実践研究センターに「全国ボランティア活動総合推進センター」というのを、略して「T A I V O」と呼んでおりますが、そのパンフレットを本日の資料の中に入れさせていただいております。ぜひ一度、ホームページをご覧くださいと思っております。なかなか私どもで大学のご支援というか、ご相談に乗りにくいところもありますけれども、広く対応してまいりたいと思っておりますので、何かございましたら遠慮なくお問い合わせいただけたら、と思っております。貴重な時間をいただきましてありがとうございました。

## パネルディスカッション

### 『学生が主役』のボランティア活動をサポートする

司 会 : 富江伸治 氏 (筑波大学名誉教授・日本学生支援機構客員研究員)  
パネリスト : 村山史世 氏 (麻布大学環境保健学部環境政策学科地域環境研究室 講師)  
足立陽子 氏 (立命館大学ボランティアセンター ボランティアコーディネーター)  
宮本 匠 氏 (大阪大学人間科学部 ボランティア人間科学講座 4年生)

**富江** : みなさん、おはようございます。私、紹介いただきました富江でございます。本日の司会を仰せつかっております。どうぞよろしくお願いたします。

今回のこの『学生が主役』のボランティア活動をサポートするというパネルディスカッションの趣旨は、ご案内のプログラムに概要が書かれているとおりでございますが、若干主題の説明をさせていただきます。もともとボランティア活動というのは本人の主体的な意思に基づいて活動するものであるわけです。それは一般の人々も学生もボランティア活動するということに違いはないと思います。ただ先ほど文科省のご説明にもありましたように学生、生徒がボランティア活動するということは、それなりの特性があるのではないかと思います。つまり学生の場合は、時間的にゆとりがあり、行動が比較的自由であるというメリットがあるかわりに、経済的にやや困難をとまなう場合がある。それから、社会的な経験がまだ少ないわけですから、そういった関係のネットワークを作るということについては、やや不得手なところがあるのかなあと思います。何よりも教育的な効果が大きく認められるということがあります。学生のボランティア活動ということに関しては、その点がきわめて強調されていると思います。

こういった特性がある中で、学生がボランティア活動をするという時に、タイトルのとおり『学生が主役』のボランティア活動をサポートするというのは、どういう意味なのか？ということをお今日の主なテーマにさせていただきたいと思います。ボランティア活動を教育的なプログラムの中に繰り込んでいく大学が増えているわけですが、教育的プログラムというのは、教育を与える側と、それから受ける側、受ける側が主体的に考えた場合は学習という言葉を使っていますけれども、主体性がどちらにあるかによって、かなり見方が違ってきます。場合によっては、自由な行動をやりたいという学生の要求に対して、ある意味では押し付けがましいところがあったりとか、非常に教育的に「これは、ちゃんとやりなさい」とか、そういうことが混ざり合ってくるわけですので、しばしば受け取る側の理解と齟齬をきたす場合があります。やはり学生が主役であって、活動していることに大きな意味を見出し、主体性を維持しながら続けていただきたい、と考えるのではないで



しょうか。学生の場合は、毎年、学年進行があるわけで、入学し卒業していくというふう  
に循環しています。そういう意味では、継続性ということ、いかに持続させるかというこ  
とも課題になってくるのではないかと考えられます。

本日そういったことで、学生が主役となるようなボランティア活動について、それぞれ  
の立場からご議論いただきたいという主旨で、三名のパネリストをお願いしてござい  
ます。

まず村山史世さんですが、麻布大学の環境保健学部の環境政策学科地域環境研究室の講  
師をなさっております。そういった意味では教員側からボランティア活動を見た場合に、  
どういう位置付けになるのか、先生の実践活動も通じた中で、具体的な中身をご報告いた  
だき、ボランティア活動のあり方についてご提言なり、問題指摘なりをいただければと思  
っております。

このパネルディスカッションは時間的にかなり限られておりますので、最初それぞれに、  
いま申し上げたように実践活動のご報告、そこから得られる問題意識、あるいは提言等が  
ありましたらということで、まず一巡目は10分か15分程度で、これは時間的にかなり厳  
しいと思いますけれども、お話しいただければと思っております。それでは村山先生、よ  
ろしくお願いいたします。

**村山**：皆さん、こんにちは。麻布大学から来ました村山史世と申します。私は、日本学生  
支援機構がまだ日本育英会だった頃、大学院時代でしたが、大変お世  
話になりました。まだ数年かかりますが返還させていただきます。  
こちらの集いには、2年前にも参加させていただきましたが、今回は  
壇上からお話させていただく機会を与えていただいて、嬉しく思いま  
す。私に与えられたテーマの『学生が主役』のボランティア活動をサ  
ポートする』について事例を中心にお話します。



麻布大学は神奈川県相模原市にあります。1890年に創設されまし  
て、建学の精神は「学理討究と誠実なる実践」、それから教育の特色としては「師弟同行」  
ということがいわれています。2学部5学科で構成される大学です。私は法律の教員とし  
て環境保健学部環境政策学科に所属しています。環境政策学科は1999年に創設されまし  
た。「人と動物と環境の共生」が、麻布大学の研究・教育のテーマになっています。

麻布大学のボランティアサポートについてお話しします。学生課でのボランティア情報  
の提供や窓口対応は行っているのですが、それ以外のことは組織として特別のことはして  
いません。ボランティアセンターは存在しないし、ボランティアサポート専門の教職員を  
配置しているわけでもありません。個々の教職員が、個別に対応しているのが実状です。  
ただ、先ほど述べたように、大学の建学精神「学理討究と誠実なる実践」、つまり専門教育・  
専門研究の成果を社会や地域その他あらゆる場所で実践していくこと、そして、教員が一  
方的に学生を引っ張るのではなくて、教員と学生が同じ方向を向きながら、実際に試行錯  
誤する「師弟同行」が大学の特色となっております。これは、学生のボランティア活動お  
よび大学・教職員によるボランティア支援にも活かされています。そして、自発的な学生  
のボランティア活動は、「地域共創」すなわち地域と大学が一体となって、地域を創造する  
こと、あるいは産官学民の連携による共通の舞台、「プラットフォーム」の構築につな  
がっていきました。

学生たちは、主に環境やまちづくり、動物に関わるボランティア活動に参加しています。  
今日は環境やまちづくりの事例を紹介しますが、獣医学部動物応用科学科の学生たちも「ス  
タディ・ドッグ・スクール」や「動物介在療法」など専門教育・研究を活かしたユニーク

な活動をしています。ちょっと面白いのは、お神輿かつぎに参加した2名の学生が地域の人にスカウトされて消防団に入団しました。まさに命がけのボランティアです。専門知識を活かした活動というよりも、意欲さえあれば普通の若者でもできる活動です。4年間で卒業してゆく学生が消防団に入っても大丈夫なのか、との議論が消防団や市でもあったと聞いています。結果として学生の入団は良いきっかけになったようです。その後、市は広報の一面を使って、学生や女性の入団を呼びかけていました。では、事例を紹介していきます。

まずは「淵野辺ボンバイエ！」です。「ボンバイエ」という言葉を知っていますか？「ボンバイエ」とは西アフリカの言葉で「あいつを、やっつけろ」とか「倒せ」という意味です。プロレスラー・アントニオ猪木を応援するときに「イノキ！ボンバイエ！」と掛け声をかけます。「やっつけろ」というよりむしろ「地域よ元気を出せ」という想いを込めてこのまちづくり交流イベントに「淵野辺ボンバイエ！」という名前をつけました。第1回は、2003年に実施しました。NPOサポートセンターが主催する「NPOインターンシップ」に参加した学生たちが体験的に学んだNPO、地域を、大学に帰ってきてから、学生自身の問題としてどうしていくかという問題意識で交流イベントを企画しました。「自分たちの場は自分たちで創る」ということです。NPOだけではなくて商店街、行政、企業、いろいろな人たちと一緒に共通の基盤で地域のことを考え行動するために学生自体がまちづくりの主体となって、他の主体とのつながりを創りました。この写真が2003年の第1回の様子です。NPOインターンシップに参加した学生が後輩たちにNPOでの体験を報告したり、学生、公民会のリーダー、商店街の理事長、NPOサポートセンターの山岸秀雄理事長に来ていただいて、まちづくりシンポジウムを行いました。これをきっかけに、学生たちは地元地域に参画してゆきますが、ボンバイエも継続していきます。

2回目は2005年に行いました。相模原市も後援してくれまして、子どもたちや企業、市民活動の人たちも参加しやすいイベントにしました。企業、教育機関、行政、市民団体、約25のブース出展者を学生たちが交渉して呼んできました。プログラムも異なった主体が共通の基盤——私達はリングと呼んでいます。——と一緒にたって、地域のつながりが構築できるよう考えました。来場者と一緒に環境ゲーム「プロジェクト・ワイルド」というゲームで交流したり、政岡俊夫麻布大学長、相模原・町田大学地域連携方策研究会事務局も務めるパートナーシップ推進課課長、そしてNPOサポートセンター山岸理事長をパネリストに「大学地域連携プラットフォームシンポジウム」を開催しました。また、子ども向けのプログラム「子どもエコ探検ツアー」では大学生が麻布大学の環境配慮施設を紹介し、子どもたちもその経験を発表しました。または商店街と学生の協働のまちづくりの成果を振り返りました。麻布大学だけでなく、普段商店街と一緒に縁日を盛り上げている青山学院大学の学生たちも参加して、得意のジャグリングを披露してくれました。

2006年度は、学生たちだけで相模原のパートナーシップ助成金を獲得したので、企画・運営は学生に任せて、私はあまり口出ししませんでした。そうしたら、市の広報で開催告知をしておきながら2回延期をする、会計処理はちゃんとしない…、大変なことになりました。2回目の延期のときは、私も学生と一緒に相模原市役所に呼ばれて謝罪しました。その後、学生たちは企画を立て直し、地域の人と一緒にイベントの幕を開けました。地元の企業や市民団体はじめ多くのブース、千葉商科大学や和光大学の学生たち、それから子どもたちもたくさん来てくれて大いに盛り上がりました。

第1回のボンバイエで交流を始めた淵野辺の商店街は毎月縁日をしているのですが、そ

このテント張り、片付け、缶バッジ、パフォーマンス…に毎回学生たちが参画していったことが2回、3回のボンバイエの成功につながってゆきました。学生たちは、自分たちができることで無理せず地域に参画してゆきました。これも自発的な活動であり、まちづくりボランティアと言えます。写真のこの缶バッジ屋で、歌謡曲を歌って踊っているのも学生です。参画する学生がだんだん増えて、20人くらいで歌って踊っていました。学生が増えてくると、見る人たちも増えてきて、もう地域の子どもの居場所としてなくてはならない場になってきています。はじめはそれほど歓迎されたわけではありませんでしたが、一年経つと商店街の理事長が卒業する缶バッジ屋の学生に感謝状を出してくれました。学生ならではのパワーを発揮したのは「文化と教育のまちづくり」がキーワードであるふちのべのまちづくりで、縁日でお茶会をやることになったとき、学生は大学の近所の紙管工場に協力を頼んで、紙製の移動式茶室をこしらえました。これは畳以外は全部紙です。銀行の駐車場に茶室を設置して、お茶会をしました。学生と商店街の協働はいまでも継続しています。NPO インターンシップの受け入れ先 NPO「WE21 ジャパン」がインターンだった学生に商店街の理事長を紹介してもらい、商店街のバックアップをうけて「WE ショップ 湊野辺店」も開店しました。

次に商店街でのごみ分別ボランティアの話をしてします。麻布大学には、ごみ分別サークルが存在し、また学園祭では、エコ容器を活用したエコ学園祭も学生主体で実施していますが、これを湊野辺の商店街のお祭りでもやりました。あいにくお祭りがちょうど期末テストに重なりまして、テストのない4年生以外はあんまり参加できない。そこで地域の子どもたちと一っしょに分別ボランティアをすることになりました。この写真は、駅前で、子どもたちに対してボランティア事前学習をしているところです。説明している女子学生は、卒業後産業廃棄物のコンサルタントになりました。ボランティアの経験が彼女の生き方につながっていったのではないかと思います。この時に事前実習に来てくれた10人の小学生は、今度は小学校で呼びかけてくれて、100人くらいボランティアを連れてきてくれました。お祭りでは本当に楽しそうに働き、前の年に300キロ出たゴミを160キロまでに減らしました。終了後学生たちは、ボランティアの成果を、小学生に報告にいきました。小学生のほうからも、さまざまなフィードバックがあって、「ごみ分別が楽しかった」との感想をいただきました。

一緒にボランティアをした当時5年生の小学生たちは、6年生になると自ら動き出しました。アルミ缶がお金になることを大学生から学んで、自分達で回収を始めました。大学祭にまで分別ボランティアにやっけてきて、アルミ缶を分別して小学校に持ちかえり、洗浄した上で売却し、2万円のお金をつくって、福祉団体に寄付しました。自発的な学生の活動が地域で小学生に伝わり、それを小学生たちは自分たちのプログラムとして、自分達なりに活かしてきました。この写真、大学生ボランティアと小学生ボランティアが同じ目線で関係を創っています。

ちょっと時間がないので、大学の教員が、市民向けの「親子自然環境教育セミナー」を実施する際に、大学生と高校生が学習支援ボランティアとして、環境実習を実施する側に参画する事例は割愛します。

次は、相模原市主催「さがみはら環境まつり」です。私、実行委員長になってしまったのですが、市民、事業者、大学、行政の四者で実行委員会を組織しました。写真は市民の環境意識啓発と環境パートナーシップを目的としたイベントです。写真で注目していただきたいのは、このテント、それからこのパネル、学生たちがボランティアで全部準備して

います。学生ボランティアは出展者の補助もしました。高校生ボランティアも受け入れて、一緒におまつりを運営しました。ごみ分別も、焼きソバ焼いたりとかジャグリングもです。準備・片付けでの搬入、搬出も行いました。また、当時開設予定だった市立環境情報センター活用方法に関するワークショップも行いました。そこでも学生たちがファシリテーターの補助に入りました。市民・事業者・大学・教育関係者・子どもと各主体ごとで分科会を組んで、環境情報センターの活用方法を話し合いました。子ども分科会には、商店街で連携をした小学生たちがたくさん集まって、「障害者やお年寄りなども使えるような情報センターにしてほしい」など、素晴らしいアイデアをだしてくれました。分科会の意見はコーディネーターに集約し、コーディネーターのシンポジウムを行い「環境情報センターへのメッセージ」にまとめて、「仮」環境情報センター一日所長の「モリゾー」——「キッコロ」と一緒に愛・地球博から来てくれました——に手渡しました。

第1回の環境まつりでは、学生70人、高校生20人、第2回では、学生76人、高校生54人がボランティアとして参加してくれました。第2回環境まつりはちょっと規模が大きくなって…。北里大学や、中学生、東京ガスとか、企業や教育機関、市民団体・NPO、行政55団体が出展しました。学生・高校生ボランティアは、出展のお手伝いなどを行っています。今回の目玉企画のひとつは「エコキャラ大集合」というもので、北九州市や埼玉県、名古屋市、もちろん相模原市から、環境系のマスコット・キャラクターを招待しました。「着ぐるみに学生・高校生が入っている」と言っただけではいけません。「エコキャラと一体になってくれた学生・高校生」がたくさんいたわけです。これもボランティアだし、名古屋市の職員と一緒に「みんなで減らそうCO<sub>2</sub>」というお遊戯を歌って踊るという環境啓発活動をしてくれたわけです。他にも軽音楽部の演奏で、地球環境基金と相模原の地域の環境基金に募金を呼びかけました。さまざまな切り口の、ボランティアへの参加方法があると思っております。

最後に、ちょっとだけ…。大きなイベントばかりでなくて、日常的にも地道に「街美化アザプト」をしています。これは、相模原市と協定を締結し、矢部駅から麻布大学までの歩道を月2回ほど清掃美化活動をしています。まず路上のごみの散乱状況を目視計測してから、歩道のごみ拾いをして、その個数と重量を計測し、研究・教育にも活用しています。他にも緑地ボランティアとかがあり、学内のものなのですけれども、さまざまなことをやっております。

このような活動は、別にボランティアとか社会奉仕を目的としたわけではありませんでした。授業やサークルで学んだことを現場で試したいと学生たちが自発的に考えて、具体的な行動を地域あるいは学内で行っていったことの結果です。授業の単位やアルバイト料で動機付けられているわけではありません。だから、麻布大学の学生の事例は自発的・主体的な活動だと思います。これは学生の環境活動とかまちづくりといっても良いと思います。ひとつ補足ですが、大学は何にもしていないわけではなくて、「環境フィールドスタディ」という科目を設置して、学生の主体的な活動を単位と認めて、正規の大学教育に位置付けて、学生を動機付けることも一応はしております。具体的な「学生が主役」のボランティア活動の事例ということで、最初はこれくらいにしたいと思います。

**富江**：どうもありがとうございます。いまのお話では、それぞれの活動のプロセスその他について、もっと詳しく聞きたいと思っております。村山先生も、もっと語りたかったと思いますが、時間の制限がありますので、一応第一回目としては、このぐらいにさせていただきます。ただいまの村山先生のお話は、小規模大学での一

一般的な地域貢献的なボランティア活動を例に引いていただき、うまくいったというケースの事例紹介をしていただきました。また後ほど、お話しはいたたくつもりであります。

次に足立陽子さんにお話しを伺います。足立さんは立命館大学のボランティアコーディネーターをなさっております。立命館大学は、非常にそういったサービスに力を入れておられ、かなり組織的な対応をされているケースとして取り上げさせていただいております。コーディネーターという立場から全学を見渡した中で教育プログラムとしてのボランティア活動とか、そういったことの視点も含めてお話しただけると思いますが、どうぞ、よろしく願いいたします。

**足立：**皆さん、こんにちは。ただいま、ご紹介にあずかりました立命館大学ボランティアセンターでボランティアコーディネーターをしています足立と申します。よろしく願いいたします。きょうは立命館大学ボランティアセンターの取り組みを、まずご報告させていただきたいと思いますが、私はボランティアコーディネーターという立場から、ある意味で教員と学生の間立つこともあります。また、私は大学の事務職員とか専任職員とかではないので、そういったことから大学の職員と学生の間立つこともあります。あるいは活動する学生と、受け入れ側の地域の方の間立つという場合もあります。そのような立場から、きょうは話させていただきたいと思えます。



まず立命館大学ボランティアセンターですけれども、できたのが 2004 年に京都のキャンパスに、そして今年度から滋賀県のキャンパスにもできました。まだできて京都のほうでも 3 年目ということで、日が浅いセンターではありますが、ようやくひとつの形ができてきたかな？というようなところです。センターができる前から、本学には学生の活発なボランティア活動の実態がございまして、例えば阪神大震災の時に学生自身がボランティアセンターを作って送り出すということや、あるいはボランティアサークルもたくさんありました。ボランティアサークルがボランティア活動をするというのは、いわば当たり前のようなことでありますけれども、ボランティアサークル以外のサークルも、例えば手品をするサークルが地域の社会福祉施設に行ったり、理工学部の学生が理科の実験を子どもたちにやってあげるというような、そういった地域交流も非常に盛んでした。またセンターができる前、1999 年からボランティアコーディネーター養成プログラムというものを京都市社会福祉協議会と連携して行っていたというような実績もありました。さらに大学全体の方針として、本学では豊かな個性というものを身に付けてほしいというような方針があり、この豊かな個性を育てる上でボランティア活動が有効であろうというように大学全体で確認がされました。そして、このボランティア活動が大学内で止まるものではなく、広く地域の中で活動することで、これからの時代、大学の教育というものがキャンパスの中では収まらないだろうと考えております。広く地域に学生や教員も出て行って、地域の中で学ばせていただく、そして地域にも貢献していくという中での教育的な取り組みが必要であろうと考えております。そういったことから学生自身が地域の貢献を通して学びを得るというような、サービスラーニングという要素を目指しているセンターであります。

次に立命館大学生のボランティアの参加状況ですけれども、現在している人が 12.1%、以前したことがあるという人を合わせても半分にはいかないですが、けっこうな数がいるということが分ります。また活動分野としては、子どもと関わるものであったり、高齢者や障害者、そして国際交流という順に続いています。では具体的に学生が地域でボランテ

ボランティア活動をする中で、一体どういう学びを得ているのか？ということですが、それを示している調査がひとつございます。これは障害を持っているお子さんの放課後や休日のサポートの活動に関わった学生の意識調査ですが、その結果、活動に参加して何が身に付きましたか？どういったところで勉強になりましたか？ということを知ったアンケートの結果です。2点大きなポイントがあります。ひとつは学生がボランティア活動をした中で、社会的・人間的成長を得ているということが、この責任感であるとか協調性といった項目から伺うことができます。もうひとつは、やはり活動に携わった中で障害に関する知識といったような、専門的な知識を身に付けているといえます。それは本を読んでいるとか授業に出ているということだけでは分らない、具体的な地域での経験を通して学んだということがいえると思います。

次に本学では、こういったボランティア活動の教育的効果に注目をして、かつ大学の理念に沿った形でボランティア教育を行おうということで、ボランティア教育の体系化を図っていくことを目指しています。その全体像ですが、この矢印が下のほうから1回生から4回生に向かっていくとして、その中で学びを三段階に分けました。矢印の下側が課外自主活動、そして上が正課教育と位置付けています。ひとつずつ見ていきたいと思います。

まず第一段階でコアとなるプログラムが正課教育、正課授業としての地域参加活動入門です。まず地域での学びや地域での活動が何かということを知らないと、参加する意欲とか道筋も作れないということで、地域ボランティア活動参加への動機付けがここでの目的になります。それから課外自主活動としてはボランティア導入プログラムが挙げられます。例えば学外のボランティアを受け入れている団体とか、学内のボランティアサークルを一同に集めて、ブース形式で紹介するといったものであったりとか、事前学習、事後学習を含めたボランティア体験をする入門講座などが挙げられます。そして、こういったきっかけ作りのプログラムは、ボランティアセンターの中に学生スタッフというものを配置しておりまして、その学生スタッフたちが主体的に企画や運営をしてくれています。こういった取り組みを踏まえて、ボランティア活動や地域の活動に関心を持つ、そして実際に参加していく道筋を大学としては用意したいと考えています。ただ、もちろんボランティア活動ですので参加するしない、行く行かないは学生の自主性に任せていくことになってしまいますけれども、大学としてはより興味を持てる活動であったり、学生にとって学びを得られる活動というものを、責任を持って紹介したいと考えています。

次に第二段階にまいりまして、ここでは、まず地域活性化ボランティアというものがあります。これは「ボランティアで学ぶ」というようなベクトルに位置付けるわけですが、本学のボランティア教育のコアとなるサービスラーニング科目を整備することを目的としています。また学部、学年を越えて地域で学びあうことで、地域に貢献しながら学ぶということを狙っています。学生は毎年入れ替わりますが、大学としてはその地域に対して継続的に学生を送り出していくことによって地域貢献につながると考えています。この地域活性化ボランティアプログラムですが、教育的な効果がある、学生にとって学びとか成長が得られる、というように考えられる活動の参加に対してはプログラム化し、一定の手順を踏むのであれば、そこに単位を付与してもいいだろうと判断をしました。そして今年度より要件を満たした学生に関しては2単位を認めています。その要件というのは事前学習や事後学習を行うということや、定められたレポートを提出することです。学生としては、そういった面倒くさいことはいらない、純粋にボランティア

活動がしたいという学生には、これまで通りふつうのボランティア活動に参加してもらえば、それに向けた支援を行います。そうでなくて、もうちょっと勉強になるように参加したいということであれば、この仕組みに則って参加してもらえば、単位を与えるということになります。

次に、この地域活性化の目的は、その参加学生がボランティア活動を通じて地域に貢献しつつ、地域社会の一員としての自覚と能力を育み、専門知識の応用的な理解を促進することとしています。立命館大学ボランティアセンターと地域のNPOや諸団体が協定を結んで行っているのですけれども、これまでのプログラムを見ていますと、今年度は6プログラムを開講したのですが、連携先として、次の三つのパターンが考えられます。ひとつはこれまで教員の方がフィールドワークやゼミなどで、すでに実施しているものをセンターと連携して、さまざまな学部の受講生が参加できるというようにしているものがあります。ふたつめとしては地域から「ボランティアを募集したいのですけど」と依頼があったものを、単に募集するだけではなくて、学びがあると判断したら「プログラム化しましょうか」と声をかけるというものがあります。三つめはボランティアセンターの方から依頼してプログラム化するというものもあります。次に、連携の条件ですけれども、例えばそこに地域課題が存在することや、それに関連しますが学生が学べる仕組みが存在すること、そして大学側にも私たちボランティアコーディネーターというものがいますが、地域にも学生を指導するスーパーバイザーとか、調整するコーディネーターが存在することが一例として挙げられるかなと思います。

この地域活性化プログラムの参加学生の動機として、いままだきっちりと分析できていないわけではありませんが、大体次のような三段階ぐらいの学生が多いかなと思います。まずひとつ目は、きっかけとして、その分野に興味はあるけれども、具体的には分らないといったような学生です。例えば将来、先生になりたいと思っているけれども、実際に子どもたちと関わることによって、自分が向いているかどうかを確かめてみたいということであったりします。そして、さらに少し深まった段階に行くと、専門の学習を意識しはじめるということがあります。例えば街づくりのゼミに入ったから実際に街づくりに関わることによって学びを深めたい、自分の専門を深めたいというような意識になります。そして、さらにそれがステップアップしますと、主に4回生が多いと思うのですけれども、具体的な将来と結びつけて専門を活かしたい。例えば公務員になりたいので活動を通して行政とNPOの連携について研究し、卒論にまとめたいとか、経済学部から過疎地の資源を分析し都市と農村をつなぐ取り組みを提案したいといった、自分の力を活かしたいというような動機を持っている学生もいます。

次に、同じ第二段階の中でも、先ほどは「ボランティアで学ぶ」ということでしたけれども、「ボランティアを学ぶ」というような方向のボランティアコーディネーター養成プログラムというものがあります。これは一年間で10単位の正課授業なのですけれども、地域活性化プログラムのような地域の課題の解決を図ったりとか、地域活性化を目指す時には、地域の資源を把握して調整するリーダーの存在が必要になってくると思います。そこで、そういった人材を養成するというので、このコーディネーター養成プログラムを置いております。ここには本学の学生だけではなく、地域からの社会人の方も一緒に入っていて、お互いに学びあうということを進めています。

次に、最後の段階ですけれども、学生主体の地域参加、情報発信という第三段階を置い

ております。これは地域密着のメディアを通じた情報発信活動ということですが、ボランティア情報であったりとか、地域活性化ボランティアやボランティアコーディネーターで学んだことを、コミュニティーFMなどを使って地域に向けて発信していくということです。第三段階のもうひとつの位置付けとして学生コーディネーター、学生スタッフの配置があります。先ほどの第一段階のボランティア導入プログラムなども学生スタッフが主体的に運営をしてくれているのですが、学生スタッフたちが他の学生に対して情報発信をしていくということです。同じ学生という立場からボランティアの魅力を伝えていってもらったり、入りやすいボランティアセンター作りなどをしてくれています。まさにピアサポートという視点から学生が活躍してくれています。ということで私たちの理想を申しますと、まず地域参加活動入門とかボランティア導入プログラムというところでボランティア活動を始めた学生が、地域活性化ボランティアプログラムなどで、より地域に密着した活動に関わり、そしてそういった地域の経験をもとにボランティアコーディネーター養成プログラムで主体的に地域の問題を解決できる人材へと成長してほしいと考えていまして、そういったところで養われた技術とか知識をさらに高め、また地域に還元していき、他の学生に伝えていくという意味で第三段階があると考えています。もちろん、これはどの段階からも一方向だけではなくて、どの段階からでも入ることは自由でして、必ずしも第一段階から始めないといけないということではないです。それまで高校生の頃から活動している人は、いきなり第二段階、第三段階ということもあると思いますし、例えば4回生であってももう一度最初から体験したいということがあると思うので、学生個人の関心とか経験に基づいて自らが決める事ができる取り組みだというふうに考えています。なおかつ、この取り組みは、取り組みを通じて得た経験を、さらに新しい世代とか新しい学生へ、今度は伝える側の立場になるというところにポイントがあると考えておまして、こういった循環する学びの構造作りというものを仕掛けていきたいなと考えています。地域に対しても、このような様々な段階の体系的なプロセスで貢献したいと考えています。

今日のテーマは『学生が主役』のボランティア活動をサポートするということですが、立命館大学ボランティアセンターの役割としては、ふたつの視点が大事だろうと考えています。まず一方は学生に対してで、どのように学びにつなげることができるか？ということを考えていると思っています。例えば、ボランティアがしやすいような環境の整備であるとか、また学びにつなげるボランティアプログラムを充実化させることや、情報提供をすることだと思います。一方、大事な視点というのが地域に向けてどのように貢献できるか？ということが必要だと思います。それは継続的に学生を送り出す、ということかも知れませんが、あるいは教員などが持っている大学の知的資源を提供することだと思います。そのふたつとも視点が非常に大事だと思います。そういうことを実現するために、地域のボランティアセンターや関係機関との連携というのが非常に大事だと思います。

最後に、本センターの現在考えている課題などを挙げさせていただきたいと思っています。まず、評価軸の検討ということです。それはこういったプログラムに対してでもそうだし、一般的な学生の自主的なボランティア活動に対してもそうだと思いますが、一体どうなったら学生が学んだといえるのか？逆に地域に対しても、どうなったら地域が活性化したといえるのか？あるいは大学のボランティアセンター自体の評価とか、そういった評価軸というものが必要ではないかと思っています。また私共の取り組みの第三段階である

「学びの循環」というところを、どう作り出していけるか？というのが非常に大事だと思います。今年体験した学生が築き上げたノウハウなどがありますが、それを来年の学生に引き継いでいくというようなことも大事ですし、そういったノウハウをどう循環させることができるか、といったところが課題だと思います。また、そういったプログラムの連携先の拡充です。学生の学び・学びとってしまいますと、地域にとっては、「じゃあ地域は教材か」ということになってしまいますので、そうではなくて、学びと地域に対しての貢献というところのバランス、それを考えた上で連携先と連携を図っていくということが大事だと思います。その中でやはり継続的に関わるということ、責任を持つということが地域にとっての重要な態度だと思いますし、またそういったいろいろな段階での関わり、重層的な関係作りができればと思います。

立命館大学は非常に大きな総合大学でありますけれども、その中のサービ斯拉ーニングの展開というものは非常に難しいなあと思っています。ひとつのテーマに対してさまざまな専門分野の学部の学生が取り組むということも学際的な大きな意義があると思います。あるいは理工学部のサービ斯拉ーニングプログラムといった専門知識を活かすというような、より専門的なプログラムを作る場合は、学部とか教員との連携ということも必要になってくると思います。今後、どういう取り組みができるかということも、もう少し考えていきたいなあ、というところで本学のセンターの取り組みの紹介を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

**富江：**立命館大学のケースは大規模な総合大学の中でのフレームのしっかりした教育プログラムとしてのバックアップを考えておられるケースであったと思います。例示として挙げていただいたなかで、地域活動にどのように取り組んでいるかということもご説明いただいたと思います。第一段階、第二段階、第三段階というプロセスを設定して、第一段階では動機付けから、第三段階でより専門的なことに活動をつなげていって、それがさらに継続するというような骨組みについてご説明いただいたかと思います。

最後に、本日の主題であります学生が主役というケースでがんばっておられます宮本さん、大阪大学の4回生で、新潟の災害の具体的な例の中でお話いただけるとと思います。よろしくお願いたします。

**宮本：**こんにちは。大阪大学人間科学部ボランティア人間科学講座4年の宮本といいます。ぼくは、具体的にどんなことしていたのか？というところからお話ししていきたいと思います。実は今年、4月から先月の頭ぐらいまで、ぼくは新潟に住んでいました。新潟に住みながら、現地の中越復興市民会議という中間支援組織に雇われて、働きながら、いろいろやっていました。ボランティアというよりも、学生のボランティアをコーディネートするような立場で動いていました。どうして、ぼくが新潟に住んでいたのか、その経緯ですが、新潟県中越地震が発災したのが2年前の10月23日ですが、その時にぼくたちの講座の先生の一人が、自身も神戸の震災の時に被災したことがきっかけで災害復興の研究をされていて、新潟に行くといわれました。そこに「学生も行かないか？」ということで二人ぐらい学生がついていき、避難所でボランティアなどをして帰ってきました。その活動報告会の形で学生が集まり、「ぼくたちでも大阪から何かできることをやれへんか」ということで、お配りした資料にありますように、講座の中でフロム・ヒュースというボランティアサークルが立ち上がりました。当初ぼくは、このフロム・ヒュースにあんまり興味もなく、中越地震の報道を見ても



「ああ毎日、地震の話ばかりやなあ」ぐらいの非常に冷たい捉え方をしていました。フロム・ヒュースが毎週のように、学生が入れ替わり立ち代りで、おもに仮設住宅の支援をしていました。その活動の拠点を引っ越すということで、引越しに男手が必要だということで「ちょっと宮本君、来てくれへんか」「じゃ、行くよ」ということでした。でまあ、拠点の引越し作業やったのですけれども、ちょうどその時にある集落で、村の人が自分たちで道をなおすということでした。「どういうことなんや?」と思っていたら、山が大きく崩れたのですね。そこはどうしても重機が行かないとなおせない所でした。しかし、そこに行くまでの道もがたがたでしたので、その道を生コンクリートを敷いて重機が通れるようにするということでした。役場がやるのを待っていても、しかたがないから自分達でやるという話なのです。それにお手伝いに行ったのが、始まりでした。最初、まあ、お爺ちゃん、お婆ちゃんばかりの村ですから「おい、お前、今日若い頼むぞ。お前、頼りにしているから」ということで「まあ、任せてください」という感じで行ったのですけれども、しだいに作業をするにあたって現地のお爺ちゃんはずごいんですね。コンクリートミキサー車のお尻からニョロニョロ出てくるコンクリートを、平らにしていくのですけれども、みんなやったことないのにクワとか使って見事に平らにしていくのですね。しだいに、ぼくなんか不器用なので全然頼りにならないことが分ってきました。「もう、お前よけいなことはしないでくれ」みたいな存在になってきました(笑)。そこで「何やこのお父さんらの、このたくましさは」「すごいな、この父ちゃん、お母ちゃんら、スーパーマンやな」ということで、その逞しさにすごい魅力を感じ「またあの人たちに会いたいな」という思いができて、現場に通っているうちに、先生から「住まないか」ということになりました。自分で選択した形を一応取っているのですけれども、自分自身の研究も関係しており、単位も履修していましたので、4月から現地に住み込んで集落支援中心にかかわっていきました。

現地でやっていたことはふたつあります。ひとつは、まずこのフロム・ヒュースがもともとやっていた仮設住宅支援というものです。それはどういうことなのかといいますと、実は神戸の地震の時の仮設住宅の入居は弱い立場の人が先だろうということで、高齢者の方だとかあるいは障害をお持ちの方をどんどん優先して先に入っていたいたのですね。その結果、従来あったコミュニティーのつながりというものが失われてしまって、高齢者の方ばかりが入られている仮設住宅だとか障害者の方ばかり入られているような仮設住宅ができて、結果、孤独死だとかの問題が出てきたということでした。新潟の場合は神戸の地震の反省をしまして、実はコミュニティーごとに仮設住宅に入ったのです。だから地震前も隣同士で住まわれていた方は仮設住宅でも隣同士という。いままでのご近所同士の付き合いの中で、見守りお互いに助け合っていたということです。そうはいっても、やはり全部地域ごとに入れるわけではないですから、半端になったり、あるいは街中のバラバラなところから、集まってきたというような、いろんなところから来られた人々の仮設住宅ができました。

その仮設住宅にこのフロム・ヒュースが中心的に入っていきました。バラバラなので、まず知り合ってもらう機会が必要だろうということで、フロム・ヒュースがやったのが足湯マッサージという活動です。これは当初集会所、仮設住宅にあったのですけれども、集会所の場所も知らなければ、行っていいのかどうかも分からないような状況の中で、足湯マッサージというのを始めました。これは、神戸の地震の時からやっていたものなのですが、お母ちゃんお父ちゃんに椅子に座っていただいて、桶にお湯を張り、それにまず足を付け

ていただきます。それだけではなく、ボランティアの人が掌をマッサージします。すると、手と手が触れているということで、体もリラックスされて、被災された方がポロポロっと何気ない呟きをこぼされるということが起きるようになりました。大概、嫁の悪口だとかなのですけれども「ああ、そうですか」と聞いているうちに、被災された方もちょっと心も落ち着いていくようでした。それで終わるのではなくて、そこで聞いたお話を皆で後で集めて、いまどういったことが課題になっているのだろうかということ、そこから導き出し、現地の社会福祉協議会などに繋げていくというようなことをやっています。

この足湯マッサージの活動で、非常に面白いというのか注目したいと思うことは、毎月一回行っているのですけれども、いつも行った後に大阪から来られた方全員にお手紙を出しています。「来てくださってありがとうございます。次の足湯は何月何日にやります。この時はいっしょにたこ焼も焼いたりします」とかというような告知も含めてお手紙をしていますが、仮設住宅のお母さんが、その手紙をすごく大事にされていまして、全然足湯と関係ない時に集会所にお邪魔した時に、ぼくが大阪から来ているといいますと「あんさん、じゃこれ、この子知ってるかい？」とかいわれて、持ってきたカバンの中からそのハガキを出してきてですね、「ああ、知ってます」とかいたりしているのです。買い物のカバンに手紙を入れて持ち歩かれているのです。だから、遠くから学生が来るっていうことの意味が、そんなところにもあるのかな？ということを感じました。

もうひとつ、大きな活動として現地でやったことは集落の村づくりです。ぼくが中心的に入ったのは中越地震の震源があった集落なのですけれども、本当に高齢化率 50%というお爺ちゃんお婆ちゃんばかりのところ、何となく危機感もあるのだけれども誰も先頭には立たないというようなところに、ぼくは入って行きました。そこでこのぼくの仕事はその「集落おこし」と、現地の学生のメンバーづくりということだったので、「じゃ、一緒にだけへんかなあ？」と思って一緒にやりました。何をやったかという、まず村の人がどんなことを考えているのか聞ければと思いましたが、いきなり家に行ってもなかなか話しくいからです、畑を借りて畑作業しながら、いろいろお話を聞きました。最初、何やったらいいかわからないので、モヤモヤしながら耕していました。すると、まあポロポロと「ちょっと盆踊りの輪が小さくて狭いから、宮本くん、若いやつ呼んでくれねえかな」とか、あるいは、「道普請」ていって道を掃除する村中の仕事があるのですけれども「年寄りばかりでキツイから、ちょっと若いやつ呼んでくれねえか」とかいわれました。年寄りばかりでキツイからというのは口実で、実は若いやつと喋りたいのですけれども(笑)。そんなところに学生がどんどん行って、畑だとか、あるいは村のお祭りだとか、そういった行事に参加しました。これはぼくはきょうのテーマのところだと思うのです。すごい山の集落なので、例えば春だったら、いろいろ山菜とかを沢山出してもらえるんですね。お茶飲みに行っても漬物自体がすごくおいしい。その学生は「わあ、これ何ですか？これ、山ウドっていうんですか？」だとか「へえ、すごいですね。これ、むちゃくちゃおいしいですね」といって、村の人も、そんなん、いつも食べていたものだから、そんなん大したことないと思っていたのに、何か若い学生が喜んでいたので「じゃ、これも食べろ」とかって、次のお皿が出てきたりとかして、だんだん村の人が生き生きしてきたっていうか、元気になってきたっていうか…。たぶん、これは学生がちょうどいいのだろうなあっていうことを非常に強く感じました。というのは、小さすぎる子供だったら場の空気も読まないし、あるいは、年配の方だったら、山ウド出されても「ああそう、山ウド、こうして食べたらおいしいんだよ」とか、言ってしまいそうです。学生だったら「ああ、これ山

ウドっていうんですか？」というレベルから入っていきますから、学生が何かちょうどいいのかな？と思います。こういう村おこしなどは、実は学生だからできるのじゃないかな？ということを実地で強く感じました。

最後なのですけれども、先ほど村山先生からもボランティア意識だとか、自覚のないボランティアだとかというお話がありましたけれども、ぼくが強く感じているのは、どうも何かボランティアのことを作業だと思われているのかなあと。ぼくはボランティアは作業じゃないと思うのですね。ボランティアは作業だと思うから人足みたいなものが出てくるのかなあ？と。これはボランティアなのかどうか怪しいなというのが出てくるのかなあ？と。ぼくは、ボランティアというのは、たぶん関係性の問題なんじゃないかなあと思っています。というのはボランティアという立場で入る人間と現場にいる人間が、かけがえのない存在同士で、〇〇さんと〇〇さんっていう交換できないかけがえのない関係性で…ふれあいといいますか、そういった関係性がボランティアなんじゃないかなあ？ということを実地で強く感じました。

**富江：**どうも、ありがとうございます。まず、お三方に一巡でお話いただいたのですが残り時間も大変少なくなってきました。いまの宮本さんのお話は、具体的なボランティア活動の中に入り込まれて、そこから得られた経験上、作業とか物で何かをやるということではなく、関係性の問題ではないか？というふうな新しい認識を提示していただいたように思います。



二巡目に入ろうと思うのですが、きょうのそれぞれのお話のケースが非常に密度の濃いものですから、どういうふうにとまとめて、二巡目のテーマをどうしぼろうかなあ？とちょっと混乱状態にあります。印象的に申し上げますと、学生がボランティア活動をやる場合に、まず動機付けですね。なぜ、その活動に参加するか？ということが非常に大事そうだというお話を、お三方ともされたように思います。それからお三方とも、ボランティア活動の中で中心的なコーディネーターの役割を果されておられ、その経験がベースになっているから、非常に迫力のある語り口になってきているのだなあとと思います。全ての話の中に「学生が主役」ということが背景にあってお話をいただいているのですが、今度は、その学生が主役ということはどういうことなのかという点から見て、動機付けをどうするか？それからインセンティブを高めるためにはどうあるべきか？といったようなお話をいただきたいと思います。あまり時間がございませんので、ここであえて、これだけはいっておきたいということがありましたらば、一言ずつということをお願いしたいと思います。

今度は逆廻りで、宮本さんから、こういうことが支援としてほしいのだとかということがありましたら、どうぞお願いしたいと思います。

**宮本：**はい、ふたつあります。お配りした資料にもあるのですがすけれども、ひとつはボランティアセンターだとかもありますけれども、まず学生にとって身近な存在というのは教員じゃないかな？と思います。新潟でも、すごく盛んに活動している学生の先生というのは、別にボランティアの研究をされているわけではないのです。雪の研究をされている理系の先生ですけれども、やっぱり研究スタイルが現場と向き合っているといいですか、村のお父ち

ちゃんと喋りながら、「これ、雪をどうするか？」というようなお話しするところから、切り口に理系の研究をされているからならではの先生で、そういった現場に向き合って研究される先生がまず評価されるべきなのかなあ？と思います。そんな先生のところの学生というのは、やはり自然にボランティア活動だとか、そういう現場に参加していくのじゃないかなあと思います。もうひとつは、やっぱり現場の受け入れ先といいますか、大学側に面白い現場を紹介していただけるようなことがあったらいいんじゃないかなあと思います。例えばボランティアセンターに行ったら「じゃあ今度の日曜日にここの商店街でこんなことがあるよ」と。「ここのおっちゃん、すごく面白いから、ちょっと話、聞いてみ」というような情報をいただけるようなこと。実際今後、面白い現場があれば継続的な活動につながっていくのかなあとも思いますし、学びも大きいのかなあとも思いますので、ぼくはふたつ、教員が評価されるべきということと、面白い現場を提供していただければということをお願いしたいと思います。

**富江**：ついでに伺いたいのですが、いまの活動で自覚的にわれわれは主役の役割を果たしたということはあろうかと思いますが、何か「こういうことはやめておいたほうがいい」ということがあれば(笑)。

**宮本**：やめておいたほうがいいよ、というのは学生側ですか？

**富江**：支援する側で。

**宮本**：やめておいたほうがいいよ…。ちょっとまあ、言いにくい部分もあるのですが、例えばボランティアを単位として認定するという動きですが、まあ単位として認定するかどうかが問題じゃなくて、結局は面白い現場がそこにあるのかどうかということが大切です。何か単位にしても、まずボランティアをやらせろというのが先行するのじゃなくて、面白い現場があるのだったら別にそれが単位として認定されようが、どちらでもいいと思います。何か別に、どこに行こうかという現場もないのに単位認定しますということで学生が来ると、現地で経験したのでは迷惑以外他ならないような学生も来るのですよ。もう「やる気ないのなら帰ってくれよ」というような。面白い現場だったら、ついてくる学生もあると思いますし。まず、そういったことが先にあってこそその単位認定の話なのかなあと個人的には思っています。

**富江**：どうもありがとうございました。順番が逆に行っていますので、足立さん、同じような趣旨で、学生が主役とはどういうことなのか？という視点からよろしくお願いします。

**足立**：先ほど、動機付けというところが共通しているというようなお話にもありましたけれども、まずコーディネーターという立場からしますと、その動機付けのプログラムをする際に、実は最近少し変わってきたかな？というか、非常に難しいなと感じていることがあります。それは先ほど高校生とかのボランティア活動が、まあ奉仕活動というふうに呼ばれていましたけれども、昔に比べてボランティア活動をやったことがあるという人が非常に増えてきているのですね。それは、悪いことだとは思わないのですが、最初きっかけ作りのプログラムをする時に、例えばボランティアのイメージとかを聞きますけれども、非常にネガティブなイメージを持っている人が多くいて、そんなネガティブなイメージを持っているのに参加してくれてありがとうという気分なのですけれども、それが体験が終了すると非常にポジティブに変わっていたりとかするのですね。それはやはり、やったことがなかったから非常にネガティブなイメージがあったというような人なので、こちらが本当に楽しいプログラム、学びに繋がるプログラムを提供すれば変わるということがあり得ると思うのです。一方で、いままで学校などでボランティア活動をやったことが

あるけれど、やってみて面白くなかったから「二度とやりたくない」という学生とかもやっぱり入ってきていたりします。そうすると、やったことはあるけれど面白くないといった学生に対して、それをポジティブに変換するのは、非常にプログラム作りとかが難しいと少し感じているところがあります。

次に、村山先生も、最初はボランティアとっていなかったみたいなお話もありましたけれども、学生の立場からそうなのですが、楽しいっていうことが、やっぱり継続に繋がっていくと思いますし、それが一番大事だと思うのですね。だからプログラムも楽しいプログラムを用意したいと思うのですが、学生はまず楽しいというきっかけから始めて、自分が楽しいとか自分の学びになるとか、自分っていう方向に向かった発想というのは、最初は持っていると思うのですけれど、同時に私たちが働きかけることによって、非常に皆がやっていることはすごく社会的にも意義がある活動なのだよ、すごく素晴らしい活動なのだよ、という社会に少し目を向けてもらうように働きかけることも、私たちの立場からできたらいいなと思っていることです。

最後に、最も言いたいなあと考えたことなのですけども、さっきも宮本君の話とかも聞いて、すごく共感したのですが、学生はボランティア活動の主役であるっていうことは、もっともそうだと思います。学びの主役でもあると思うのですね。同時にきっと宮本君もコーディネーターとしての立場も経験されたというようなことだったと思うのですけれど、活動の主役であると同時に、活動をまた他の学生に伝えていくとか、それを広めていくとか、サポートするとか、といったようなサポート側の主役でもあるのではないかな？というふうに、いまお話を聞いて思いました。だから、そういった学びの主役であると同時に学びあいの主役みたいな印象を、すごく持ちました。なので、そういった学生が築いてきた活動とかノウハウといったものを、学内にどう蓄積していくか？ということが、私たちの立場から、そういった学びあいを、どう循環させていくか？ということが、非常にサポートしていきたい点だなというふうに、お話を聞いて思いました。ありがとうございました。

**富江**：どうもありがとうございました。それでは最後に、村山さんお願いします。

**村山**：はい、まず動機付けですが、例えば着ぐるみですね。やっぱり学生自身が楽しいこと、これをやってみたいと思うようなプログラムにすればいいのじゃないかと思えます。もうひとつは、これは学生に教えてもらったことですが、彼らは一緒にボランティアをした小学生に、何のためにボランティアをするのかを説明した上で、その結果どうなったのかを報告に行くのですね。筋道は通すというか。だから、小学生であってもボランティアを単なる使っパシリではなくて、対等な存在とみなして、一緒に成果を共有していくのが動機付けになるのじゃないかと思えます。

もう一点、単位を認めても、それほどボランティアをやる学生数が増えるわけではありませんが、少しでも学生が報われる手段を単位以外でもいろいろ考えていったほうが良い気がします。今日は、『学生が主役』のボランティア活動をサポートする」というテーマでしたが、学生以外にもボランティアに関わるプレイヤーはたくさんいます。ボランティアのサービスを受ける方、大学当局、あるいは教育再生会議や中教審、ボランティアセンターもプレイヤーかもしれないかもしれませんが、やっぱりボランティア活動の主役は学生だと思うのです。その学生を、どうサポートするか？という時に、なかなか教育再生会議でも分らない問題もいろいろあると思うのです。先日、神奈川県の子供たちで、病気になっている子どもの兄弟と遊ぶボランティアグループの学生と知り合いました。私には思いも付かな

い活動です。つまり活動している学生たちのほうが、教員や大学より先に社会のニーズに気付くことがあると思うのです。その結果、学生のボランティア活動の意義が、大学の教職員には理解できないことも多々あるでしょう。理解できないから冷淡に扱うのではなく、たとえ理解できなくても、とりあえず学生の活動に自発性と楽しさと筋道があるかどうかを注意しながら、肯定的に認めていくことが必要だと思っています。それから制度的なサポートと学生のサポートというのは、切り離して考えたほうが良いと思います。教職員は、予算がないとか、人が足りないとか、ボランティアセンターがあればなあとか、よく言い訳しますけれども、制度が整わなければサポートできないのは、違うと思うのです。ひとりひとりの学生にとって、それぞれの学生生活はかけがえのないものです。ボランティア活動を含めた学生生活のサポートは、教職員の本業ですから、ボラセンがなくても予算がなくても、やらなくてはいけないことだと思っています。そして制度がなくとも、教職員が日々の実践でできることも、実際たくさんあると思います。

それから評価の問題なのですが、社会のニーズを学生が先取りしてボランティア活動していることから、大学の教職員がこのボランティアがいいとか悪いとか、継続性があるとかないとか評価することは難しいです。学生が活動できるのは4年間しかないのは当たり前です。活動の継続性を問題にするのは、学生ボランティア以外の利害のためかもしれません。学生に問題を引き寄せれば、ボランティアの経験をした学生が社会に出てからそれを何かに活かせば、それも継続と呼んで良いのではないかと思います。

最後に一点だけ。さきほど社会奉仕という言葉が出てきましたけれども、学生に奉仕を求めて、学生の側も奉仕に応えることに存在意義や喜びを見出すようになると、その学生は自主性・自発性を失った思考停止の使いっぱしりボランティア、すなわち「パシボラ」になると思います。相手方への奉仕と相手方の喜びが評価の基準となる「パシボラ」は、ある種の共依存関係であって、学生も相手方も不幸なことになると思います。「パシボラ」学生は結構多いですよ。やはり「学生が主役」となるような自発性、主体性は意識しないと、とんでもないことになるのじゃないかと私は思っています。ともかく楽しく意義あることから、やりやすいことから始めて、意義を発見していけばいいと思います。以上です。

**富江：**どうもありがとうございました。ちょうど時間になってしまいました。一応この辺で終わりたいと思います。本当は皆さん方からもご意見等伺いたかったとは思っているのですが、後の分科会で話題にさせていただければと思います。

冒頭の文科省の専門官の講演の中にもありましたように、ボランティア活動自体は年々活発になってきているという状況を聞きました。どんな支援があるのかということも、その中にございまして、支援活動を内容的に分類した先ほどの専門官のお話を思い起こしていただければ、いろいろな支援の仕方があることが分るかと思います。支援自体も、ボランティア活動といってもものすごく広がりがありますから、その活動の内容によって有り様もかなり違ってくるのだらうなと思います。

今日お話しいただいたのは地域に対する活動という最も多いケースが主でしたが、それにぴったりするような活動としてお話いただけたのは非常に幸いだったと思います。

結論は、とてもこの短いパネルディスカッションでは導き出せません。三人のパネリストの方々から、それぞれ事例を丁寧なプレゼンテーションでお示しいただいたので、それを後ほどまた振り返り思い起こしていただいて、皆さん方がそれぞれ頭の中でまとめた上で、それぞれの活動、それぞれの大学等の組織の中で活かしていただければと思っています。キーワード的なまとめ方にしますと、大切なことは学生の動機付

けで非常に主体性を持って参加できるような環境作りが、どうやら主役となりうる一番のスタートの条件であるということのようです。それから参加したら、それが楽しく、義務的にやるのではなくて自発的に楽しさも感じながらできるような状況を作るということ。お三方ともにコーディネーターとしてそのことをかなり強調されたような気がします。コーディネーターの役割が大事で、支援には制度的な支援のシステムがあると同時に、そういったコーディネーターのそれぞれのキャラクターや能力等にかかわる部分も、非常に大きくあるらしいということであったと思います。要するに効果そのものだとか、やった結果の云々という以前に、村山さんのお話では、その経験を通じて社会人になった場合にも生きてくるのではないかということで、教育的効果、プログラムとしては当然ながら短期の効果を目に見える形で求めたいわけですが、長期的な効果も生むのだということを確認させていただいたように思います。

ということで、ちょっと時間をオーバーしたので、この辺で終わらせていただきたいと思います。第5分科会は宮本さんがコーディネーターになりますので、いまのような話で、議論をしていただければと思います。

パネルディスカッションとしてはちょっと短い時間で不十分なところはお詫びいたします。どうもありがとうございました。

## 第2部 分科会

### 第1分科会

#### 学生部職員のためのボランティア入門

興梠 寛 氏（社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事長）

いま、全国の大学において、学生のボランティア活動を支援する取り組みへの関心が高まっている。その動きは、2006年に誕生した安倍政権における『教育再生会議』における議論の内容を見ても、年々加速していくことと思われる。しかしながら、大学において、学生のためのボランティア支援に取り組むためには、いまだ十分な環境が整っているとはいえず、教職員のあいだでも試行錯誤の状態が続いているのが現実である。



この分科会は、そうした時代背景を確認しつつ、とくに直接学生への支援にあたる学生部職員等を対象に、大学における学生へのボランティア支援の在り方を解説し、さらには参加者同士の情報交換や問題意識の共有、課題解決的な研究協議を行うことを目的にして、講義とワークショップを行った。

#### 1. 講義

大学はいまなぜ、学生のボランティア活動への支援を行うのかについて、つぎの3つの視点から講義を行った。

##### ①自己への探究

学生自身が自己の生き方を見つめ発見し、探究していくためのボランティア活動支援の在り方。

##### ②社会課題の理解

現代社会の諸問題を実践活動をとおして理解し、責任ある社会人としての自覚と責任意識を育むためのボランティア活動支援の在り方。

##### ③研究成果の活用と社会還元

学生がアカデミズムと社会課題とを結びつけて、ボランティア活動をとおして課題解決的に学ぶサービスラーニングなどの支援の在り方。

さらには、大学における学生支援環境をどのように整備するのかについて、「ボランティアセンター」機能の基礎知識、担当職員によるボランティアコーディネーションの在り方について解説した。

## 2. ワークショップ（演習）

参加者同士が小グループに分かれて、大学の業務遂行におけるボランティア支援に関する問題意識の交換や共有、さらには、あらかじめ用意した討論テーマをもとにした話しあい、全体での意見発表などを行った。

討論した内容は、学生が地域社会におけるボランティア活動を行う際にはいかなる心構えを助言すればいいのかについてである。この演習のテーマは「快適ボランティア活動術『マナートレーニング』」である。

ワークショップにおいて、参加者から提案された“ボランティアマナー”についてつぎのような課題の提起があった。

### 〔学生のボランティア活動に必要なボランティアマナー〕

キーワード	内容
①学ぶ目的の意識化	学習目的の明確化と意識の醸成／教科との関係性／人間力を学ぶ／挑戦する意識
②コミュニケーション・スキルの習得	自己表現の方法の習得／積極的態度の育成／傾聴と受容の技術／好感を得る態度の演習／相手理解の方法／仲間から学ぶ
③普遍的価値の探究と共有	生命の尊厳への眼差しを育てる／人権意識の醸成／異文化理解
④活動に必要なマナーの実際	社会貢献への責任意識／自己の役割の確認／ボランティア活動の社会的責任／信頼と良識／活動を楽しむ方法
⑤メディアリテラシーの技術	ボランティア情報の収集能力の育成／情報の取捨選択のための知識／情報コミュニケーションの方法／情報処理
⑥活動先や社会課題の理解	地域社会におけるフィールドワークを通じた現場学習／活動先や背景にある社会課題の理解
⑦持続可能な活動や組織化の方法	ルールプランニング／ワークシェアリングの方法／ボランティア・NPOマネジメントの方法／one for all, all for one
⑧安全学習	安全のための心構え／活動しやすい服装術／活動中の安全対策の理解／ボランティア保険等の理解
⑨リスク管理	活動時間の管理／危機回避の方法／危機管理の方法／リスクへの問題意識の共有
⑩活動評価の視点と方法	活動への自己評価の観点と方法／評価の公表の在り方と方法／活動成果の社会還元

## 第2分科会

### ボランティアセンターのつくりかた

村田 素子 氏（聖心女子大学学生部マグダレナ・ソフィアセンター）

「大学の数だけボランティアセンターの形がある」

第2分科会では、各参加者が抱えている疑問や課題を大切にしながらそれぞれの大学にあったセンターの在り方について考えました。

アイスブレイクと事例発表の後、参加者は6つのグループに分かれて、大学ボランティアセンター立ち上げのために急遽集められたメンバーとしてセンターづくりに取り組みました。センター設立の目的は？ 場所は？ スタッフは？ 活動内容は？ 情報収集は？ 等々、様々な切り口で話し合ってもらいました。バックグラウンドがそれぞれ異なる参加者が集まって1つのボランティアセンター像を築いていくことはとても難しかったようですが、それゆえに様々な考えが出され、話し合いは熱を帯びたものとなりました。



下記の表はグループワークの中からでてきた意見をまとめたものです。是非、それぞれの大学に合ったボランティアセンターをつくるヒントにしてください。

どんな大学ボランティアセンターをつくりますか？

目的	<ul style="list-style-type: none"><li>・学生の「学び・成長」を促す Ex. 学生の潜在的関心、能力を引き出す</li><li>・社会と学生をつなぐ</li><li>・地域社会を支援する</li><li>・実体験への橋渡しをする</li></ul>
場所	<ul style="list-style-type: none"><li>・学生の往来が多いところ</li><li>・学生食堂やラウンジ、学生会館の側</li></ul>
スタッフ	<ul style="list-style-type: none"><li>・核となる教員、職員をおく</li><li>・専従職員をおく</li><li>・学生スタッフは必須</li></ul>
センター備品・内装	<ul style="list-style-type: none"><li>・作業用テーブル ← 集いのきっかけ</li><li>・インターネット設備</li><li>・ポット、お茶、コーヒー</li><li>・ソファ</li><li>・入りやすい入口</li><li>・学生が自由に使用できる空間</li></ul>

活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティア活動情報の提供 Ex. 継続している活動、大学の特色を活かした活動情報 等</li> <li>・センター内でできるボランティア作業の提供</li> <li>・ボランティア関連講座の開講</li> <li>・初心者向け講座の開講</li> <li>・啓蒙活動</li> <li>・活動発表の場の提供</li> <li>・活動記録の集積と報告</li> <li>・調査研究(学内、学外)</li> </ul>
情報源	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学内のニーズ</li> <li>・地域のニーズ</li> <li>・行政からの情報、区ボランティアセンターの情報</li> <li>・NPO、福祉団体の情報</li> </ul>
広報手段	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページ</li> <li>・メルマガ</li> <li>・情報提供用掲示板</li> </ul>
ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外部団体（NPO、社協等）との連携</li> <li>・学生サークルとの連携</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティア情報の内容確認</li> <li>・教員をどう巻き込むか</li> <li>・学業・就業支援との線引き</li> <li>・トラブル回避のためのとりきめ</li> <li>・学生スタッフの役割と位置づけ Ex. 待遇について</li> </ul>
学生からの要望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・募集情報だけでなく意見交換のできる場にしてほしい</li> <li>・学生と大学が相互に作用する形をつかってほしい</li> <li>・初心者向け情報の提供をしてほしい</li> </ul>
心に残った一言	<p>「とにかく学生と一緒に行動を！」</p> <p>「ボラセンは場所が命です」</p> <p>「地元から期待されるボランティアセンターに」</p> <p>「地域のおじさん、おばさん（無給ボラ）」</p> <p>「教職員の理解と協力を！」</p>

## 小抜 隆 氏（東北福祉大学ボランティアセンターコーディネーター）

第3分科会では「事例紹介」、「グループ討議」、「分かち合い」の流れで会を進めました。

事例紹介では、新居浜工業高等専門学校の皆本佳計さん、東京家政大学ヒューマンライフ支援センターの居森智紗さん、東北学院大学セツルメント会の伊藤美佳さんより学部・学科の特徴・特色を生かしたボランティア活動支援や地域との連携、学生ボランティア活動の現状などについてお話をいただきました。

グループ討議では、5グループに分かれ日頃の支援等に関する悩みや課題を共有していただき、それについてお互いに意見・情報・アイデアを交換し合い、話し合いの成果を模造紙にまとめました。

各グループに学生が入っていたこともあり、対話を通じてどのような支援が必要かについてあらためて考える機会になりました。

班ごとに話し合われた課題・テーマをご紹介します。



## ■ 話し合われた課題・テーマ（一部）

- A：情報の受発信の方法、活動の動機付け、学生の支援体制の充実、活動の評価、学生ボランティア活動のスキルアップの方法 など
- B：地域ニーズと学生ニーズ、ボランティア情報の受発信、リスクマネジメント（保険への加入を含む）、学生の自主性、ボランティアサークル間の連携、よりよい活動支援のためのポイント（学生の参画、大学・地域・学生との連携） など
- C：ボランティア活動の評価（評価方法など）、学生支援のノウハウの蓄積と仕組みづくり、学生の支援体制、ボランティア活動の裾野をいかに広げるか（広報、講座・研修等）、リスクマネジメント など
- D：ネットワークづくり（外部との情報交換）、ボランティア活動に積極的に参加する学生の発見、学生ボランティアリーダーの養成、コーディネーターの必要性 など
- E：学生ニーズ・住民ニーズの把握、地域との連携（社会福祉協議会など）、コーディネーターの育成、よりよい活動支援のためのキーワード・ポイント（定期的に、ボランティア説明会、体験談、受入先に来てもらう、写真、目に見える意義、社会的評価） など

## ■ 情報の受発信と学生ボランティアの育成について

それぞれの班において課題・テーマとなった「情報の受発信」と「学生ボランティアの育成」について、参加者の皆さんから出されたご意見、ご提案などをご紹介します。

### ○ 情報の受発信

ボランティア情報の受発信について、「ボランティア説明会を開催しては」、「地域や学生（学生サークル・学生スタッフ）との連携が大切」、「早い時期に学生への動機付けを」などの声が寄せられました。地域社会（社会福祉協議会・NPO等）との連携による情報収集力の強化、説明会・インターネット等を活用したボランティアニーズのわかりやすい情報提供が課題解決の糸口として考えられます。

### ○ 学生ボランティアの育成

学生ボランティアの育成について、「“やる気”にさせる楽しいプログラムづくりを」、「学生の体験談を盛り込んで」、「受入先による講座・ガイダンスを行っては」などのご意見、ご提案が出されました。体験型を含めた多様なボランティアプログラム、学生同士がお互いに学びあう機会の創出、地域の方々が持っているスキル・ノウハウを生かした講座・研修会などのメニューの必要性についても意見・情報を交換することができました。

栗田 充治 氏 (亜細亜大学国際関係学部 教授)

先ずコーディネーターから、「なぜ大学でボランティア活動を支援・促進するのか」について、①高等教育サービス受益者の社会貢献責務というグローバルな視点、②大学の建学の使命（建学の精神）から見た意義、③地域へ貢献する大学という社会的要請、の3点を巡っての説明をした。

さらに、「ボランティア活動を支援・促進するにあたっての大学における特殊事情と留意点」について、①大学教育における teaching から learning への動きに沿って学習者の主体的な学びを尊重する姿勢が強まっていること、②限られた予算の中で、大学の教育資源を豊かにするために地域の教育的資源を活用する必要性と知恵が出てきたこと、③若者の自己実現欲求に答える必要性を自覚してきたこと、④学士課程教育の共通目標として市民性の涵養を意識しはじめたこと、の4点から説明し、大学におけるボランティア活動支援・推進はあくまでも教育の一環として、その教育的意義が発揮できるよう配慮されなければならないことを強調した。

その後、5つのグループに分かれて、メンバーの疑問や悩みを用紙に書き出し、それを模造紙に貼りだした後、それらの疑問にメンバー同士が回答を書き添えていくQ&Aワークを行い、最後に、各グループから発表してもらい、全体で答え合わせと問題の所在確認を行った。



各グループから出されたQ&Aの主なものは次の通りであった。

- \* **自主的な活動であるボランティア活動を授業の一部にする際の方法、単位数、評価、留意点**・・・ボランティア学習と位置づける、ボランティアとは何かを学ぶ授業、時間数を計算する、事前・事後学習を徹底する、特に振り返りを念入りに行う、学生の自己評価を尊重する、受け入れ先のフィードバックを参考にする方法もある。
- \* **学外で活動することに伴うリスクとトラブルへの対処法**・・・事前学習・研修の徹底で減らせる、本来ボランティアはリスクを冒さないのが原則、危ない活動には手を出さないことを事前学習で徹底、大学側の担当者（窓口）の明確化も責任体制確立の上で必要。ルールを文書化しておく、必要なスキルを学ぶ事前学習講座を設ける。
- \* **地域との連携をどう進めたらいいか**・・・お互いに「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」をきちんと行う、顔の見える関係をつくる、インターンシップ制度の活用、送り出しっぱなしにしないきちんとフォローする、地域側のニーズを大学に明確に伝える。

- \* ボランティア募集の中身チェックの仕方・・・地域の間機関（VC）などとのネットワークでチェック、団体を原則とする、学べる環境（受け入れ態勢）があるか、専門とのつながり、大学の特色との関連を重視する、必要あれば直接連絡・訪問。
- \* 学生の「ボランティア疲れ」があるようだが（学生の参加が少ない、サービスマーケティングから自主的な活動へつながらない、「楽しい」ボランティア活動の生み出し方）・・・目的意識の確認、なぜの追究、MUSTでないボランティアを、先輩学生が後輩に伝達、ボランティアメニュー選択肢の豊富化、活動場所の宣伝（何処に行けばできるか明確化）、日頃の宣伝（パンフ、メディア）。「楽しい」ボランティアの特徴は語学ボランティアなど技能活用型、地域密着型（お祭り）、単発型、受け入れ先が理解ある場合。「パシボラ」（「使い走りボランティア」の略で村山史世麻布大講師の造語。無料のマンパワーとしてのみ学生を求めているかのようなケース）対策をきちんと行う（振り返りの徹底、学生のフォローアップを念入りに）、断る勇気も必要。
- \* 学内組織の在り方（同僚の理解がない、バラバラ、他学部へ拡げるには）・・・実績を積んで理解を広げる、リーダー的な教職員・学生をつなげる、その都度記録冊子などを作り学内外に広報し先ず外側の認知を広める、現場に連れ出す。

このほかに

- \* ボランティア関連授業のネーミングの仕方（たとえば「シチズンシップ・エデュケーション」、「社会貢献学習」など）
- \* カリキュラムに隙間がない実情がある（長期のボランティア活動に対応する休学制度がまだ用意されていない）
- \* 「実習」との違い（授業の位置づけの違い）
- \* ボランティアと奉仕との違い（共に生きる営みとしてのボランティア）
- \* ボランティアとインターンシップとの違い（就業支援を目的とするかどうかの違い）
- \* なぜボランティアを重視しているのか（健全な社会を築くためには、行政セクター・企業セクター・市民セクターという三つのセクターのバランスの取れた相互作用が必要で、市民セクターを担うのがボランティアである）
- \* 昨今の「義務化」をめぐる問題  
等の問題が出され、コーディネーターがそれらについての見解を示した。

最後のボランティアの義務化を巡る問題について、コーディネーターは、性急な義務化でなく、ここまで地道に進んできた小・中・高・大学各レベルにおけるボランティア活動支援・推進の動きをサポートし、そのための環境整備に力を注ぐことが大切であるという考えを示したが、出席者2名から、消極的な賛成意見（大学ボランティアセンター教員）と積極的な賛成意見（地域の間機関スタッフ）が出された。青少年に先ずボランティア機会を与えることに今日的な意義を見出そうとする意見であった。ボランティアの義務化について賛成・反対双方の意見を出して締めくくれたことは幸いであった。

宮本 匠 氏（大阪大学人間科学部ボランティア人間科学講座4年生）

第5分科会では、「学生が結ぶボランティアネットワーク」と題して、学生が出来るボランティア、学生だからこそ出来るボランティアについて、その可能性と課題を話し合いました。前半は、各団体の紹介、後半は3つのグループに分かれ、ワークショップの形で意見を出し合いました。



ボランティア活動を始めのきっかけとしては、「出会いや深く心を動かされることがあるから始まる」という意見が出されました。また、「やりたいからやる、またボランティア活動を通して相手が喜んでくれることがうれしい、そのボランティアの活動が次の活動につながっていく」という意見がある一方で、「はじめはある程度、義務感から始まり、やがてそれが自発的な活動になっていくのではないか」という意見も出されました。

ボランティア活動を継続していく中で出てくる課題としては、まず卒業という期限をもつ学生が、どのように下の学年に活動をつないでいくかということが挙げられました。それについては、うまくボランティア活動の現場で、現場の方と学生ボランティアをつなぐコーディネーターの存在が重要ではないかという意見が出ました。また、現場での出会いや感動を共有する場を設けることが、継続的なボランティア活動につながるのではないかという意見も出ました。

ボランティア活動の現場で感じることで一番にあげられたのは、ボランティアを受ける側の表情の変化です。しかし、その一方で、一方的な善意が時には迷惑になること、負担感を与えてしまうことの事例も挙げられました。植木の剪定技術を学ぶ学校の生徒が、その技術を生かして剪定ボランティア活動をしたのですが、既存の業者の方の仕事を奪ってしまったといます。またボランティアの依頼主の家族の方からボランティアにお茶を出したり相手をするのが面倒と苦情を出された例もあるそうです。

今回の参加者の方の多くは、大学内に設置されたボランティアセンターに関わられている方々でした。どの大学のボランティアセンターでも「なかなかボランティアが集まらない」という声が上がっています。ここで今一度ボランティアセンターの役割について考えてみる必要があると思います。従来のような

「地域」から上がってきたニーズをボランティアに「割り振る」ような、事務所のようなボランティアセンターが果たして機能するののかという問題です。

今回の分科会にも、ボランティアの面白さは「出会いと感動」という意見が出されました。そのような地域の多様な方々との「出会い」や「感動」を演出できるようになるためには、まずボランティアセンターこそが深く地域のことをよく知り、結びついていなければならないのではないのでしょうか。地域と乖離したボランティア活動では、せっかくの学生の持ち味が生きないように思います。逆に、地域に上手く学生が入ることが出来れば、その両者にとって意義深い活動が出来るのではないのでしょうか。

## 平成 18 年度学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い アンケート集計結果 総括表

- 平成 18 年 12 月 8 日 (金) 開催 (東京国際交流館 プラザ平成)
- 参加者人数 191 名
- 回答者数 167 名
- 回収率 87.4%

※ 割合(%)は、端数を四捨五入してあるため、内訳の合計が計に一致しないことがある

質問事項	回答	回答数	割合
F1 性別	①男	107	64.8%
	②女	58	35.2%
	計	165	100.0%
F2 年齢	①10・20歳代	56	34.4%
	②30歳代	34	20.9%
	③40歳代	38	23.3%
	④50歳代	27	16.6%
	⑤60歳代	8	4.9%
	⑥70歳代以上	0	0.0%
	計	163	100.0%
F3 所属機関(大学・団体等)の地域	①北海道	3	1.8%
	②東北	11	6.7%
	③関東甲信越(東京都以外)	43	26.4%
	④東京都	45	27.6%
	⑤東海・北陸	18	11.0%
	⑥近畿	22	13.5%
	⑦中国	5	3.1%
	⑧四国	5	3.1%
	⑨九州(沖縄含)	11	6.7%
	計	163	100.0%

所属	質問事項	回答	回答数	割合
大学・短期大学・高等専門学校関係者	A 所属学校の種類	①大学	95	83.3%
		②短期大学	13	11.4%
		③高等専門学校	6	5.3%
		計	114	100.0%
	B 設置者	①国立	22	19.3%
		②公立	5	4.4%
		③私立	87	76.3%
		計	114	100.0%
	C 職種	①教員	38	33.3%
		②事務職員	63	55.3%
		③嘱託	10	8.8%
		④その他	3	2.6%
計		114	100.0%	

所属	質問事項	回答	回答数	割合	
大学・短期大学・高等専門学校関係者	D 担当者としての経験年数 (複数回答)	担当	①ボランティアの情報提供・相談窓口やボランティアセンター等	29	25.0%
			②ボランティアに関する授業や養成講座等	7	6.0%
			③学生課・厚生課等ボランティア担当	54	46.6%
			④学生のボランティアに関する課外活動団体の顧問	14	12.1%
			⑤その他	12	10.3%
			計	116	100.0%
	経験年数	1年未満	20	18.2%	
		1年以上2年未満	31	28.2%	
		2年以上3年未満	17	15.5%	
		3年以上4年未満	19	17.3%	
		4年以上5年未満	4	3.6%	
		5年以上6年未満	7	6.4%	
		6年以上8年未満	3	2.7%	
		8年以上10年未満	3	2.7%	
10年以上15年未満		3	2.7%		
15年以上25年未満		1	0.9%		
25年以上		2	1.8%		
計		110	100.0%		
ボランティア関係機関等関係者	E 所属団体の種類	①自治体(公社含む)	2	16.7%	
		②公益法人(財団・社団・社会福祉法人など)	4	33.3%	
		③NPO・NGO法人	4	33.3%	
		④地域・市民団体(法人化されていないもの)	2	16.7%	
		⑤その他	0	0.0%	
		計	12	100.0%	
	F 勤務形態等	①常勤	4	50.0%	
		②非常勤(パート・アルバイト含む)	1	12.5%	
		③嘱託	0	0.0%	
		④ボランティア	3	37.5%	
		⑤その他	0	0.0%	
		計	8	100.0%	
G 担当者としての経験年数	2年	2	22.2%		
	4年	1	11.1%		
	5年	2	22.2%		
	6年	1	11.1%		
	8年	1	11.1%		
	10年	1	11.1%		
	16年	1	11.1%		
	計	9	100.0%		
学生	H 内訳	①大学生	31	100.0%	
		②大学院生	0	0.0%	
		③短期大学生	0	0.0%	
		④高等専門学校生	0	0.0%	
		計	31	100.0%	
	I 設置者	①国立	5	17.9%	
		②公立	5	17.9%	
		③私立	18	64.3%	
計	28	100.0%			

所属	質問事項	回答	回答数	割合
学 生	J ボランティア活動 経験年数	1年未満	5	16.7%
		1年以上2年未満	7	23.3%
		2年以上3年未満	5	16.7%
		3年以上4年未満	10	33.3%
		4年以上5年未満	2	6.7%
		5年以上6年未満	1	3.3%
		計	30	100.0%
	K ボランティア活動内容 (複数回答あり)	①国際ボランティア	1	2.1%
		②環境ボランティア	6	12.8%
		③地域ボランティア	16	34.0%
		④文化・教育ボランティア	8	17.0%
		⑤福祉ボランティア	13	27.7%
		⑥情報ボランティア(点訳・ノートテイク等)	3	6.4%
⑦活動経験なし		0	0.0%	
	計	47	100.0%	

質問事項		回答	回答数	割合
Q1. 「学生ボランティア活動支援・促進のための 連絡協議の集い」に参加して(全体的に)		①十分満足できた	46	32.6%
		②概ね満足できた	86	61.0%
		③あまり満足できなかった	8	5.7%
		④全く満足できなかった	1	0.7%
		計	141	100.0%
Q2. 第1部 パネルディスカッションについて	SQ1. 内容について	①十分満足できた	47	29.0%
		②概ね満足できた	97	59.9%
		③あまり満足できなかった	18	11.1%
		④全く満足できなかった	0	0.0%
		計	162	100.0%
		SQ2. 時間について	①ちょうどよい	94
	②長すぎる		9	5.6%
	③短すぎる		59	36.4%
		計	162	100.0%
Q3. 第2部 分科会について	SQ1. 内容について	①十分満足できた	63	41.2%
		②概ね満足できた	72	47.1%
		③あまり満足できなかった	17	11.1%
		④全く満足できなかった	1	0.7%
		計	153	100.0%
		SQ2. 時間について	①ちょうどよい	110
	②長すぎる		5	3.2%
	③短すぎる		40	25.8%
		計	155	100.0%
Q4. 開催時期について		①適当	145	90.1%
		②適当ではない	16	9.9%
		計	161	100.0%
Q5. 会場について		①適当	153	95.0%
		②適当ではない	8	5.0%
		計	161	100.0%
Q6. 日程はどのくらいが適当か		①半日	13	8.0%
		②1日	120	73.6%
		③1泊2日	30	18.4%
		④その他	0	0.0%
		計	163	100.0%

質問事項		回答	回答数	割合
Q7. 日本学生支援機構が、 今後も「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」を継続的に開催することについて	SQ1. 継続開催について	①毎年続けてほしい	137	85.1%
		②続けてほしいが、 毎年実施しなくてもよい	21	13.0%
		③実施する必要はない	0	0.0%
		④その他	3	1.9%
		計	161	100.0%
	SQ2. 今後の参加について	①ぜひ参加したい	79	49.4%
		②できれば(機会があれば) 参加したい	78	48.8%
		③参加したくない	1	0.6%
		④その他	2	1.3%
		計	160	100.0%

## 【 アンケートのお願い 】

本日は、お忙しいところご参加いただき、誠にありがとうございました。

今後の企画立案の参考といたしたく、恐れ入りますが、アンケートにご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

※ 該当する番号に1つだけ○をして回答ください。(F1～とQ1～は全員回答 A～Kは該当箇所回答)

F1. あなたの性別は。 1 男 2 女

F2. あなたの年齢は。

1 10・20歳代 2 30歳代 3 40歳代 4 50歳代 5 60歳代 6 70歳以上

F3. あなたの所属機関(大学・団体等)の地域は。

1 北海道 2 東北 3 関東甲信越(東京都以外) 4 東京都 5 東海・北陸  
6 近畿 7 中国 8 四国 9 九州(沖縄含)

\* 大学・短期大学・高等専門学校関係者の方のみお答えください。

A 1 大学(大学・短期大学併設で両方の校名で出席の場合を含む) 2 短期大学 3 高等専門学校

B 1 国立 2 公立 3 私立

C 1 教員 2 事務職員 3 嘱託 4 その他( )

D 担当者としての経験年数(担当は現時点とし、該当番号に1つ○をして担当暦も回答ください)

1 ボランティアの情報提供・相談窓口やボランティアセンター等の担当教職員 (担当歴 約 年)

2 ボランティアに関する授業や養成講座等の担当教職員 (担当歴 約 年)

3 学生課・厚生課等ボランティア担当部署の担当教職員 (担当歴 約 年)

4 学生のボランティアに関する課外活動団体の顧問教職員 (担当歴 約 年)

5 その他( ) (担当歴 約 年)

\* ボランティア関係機関等関係者の方のみお答えください。

E 1 自治体(公社含む) 2 公益法人(財団・社団・社会福祉法人など)

3 NPO・NGO法人 4 地域・市民団体(法人化されていないもの)

5 その他( )

F 1 常勤 2 非常勤(パート・アルバイト含む) 3 嘱託 4 ボランティア

5 その他( )

G 上記担当者としての経験年数 (担当歴 約 年)

\* 学生の方のみお答えください。

H 1 大学生 2 大学院生 3 短期大学生 4 高等専門学校生

I 1 国立 2 公立 3 私立

J ボランティア活動経験年数(大学等入学以前からの経験年数も通算してください)

(経験年数 約 年)

K ボランティア活動内容について(現在活動しているボランティアを、分野別で該当番号に○ 複数回答可)

1 国際ボランティア 2 環境ボランティア 3 地域ボランティア 4 文化・教育ボランティア

5 福祉ボランティア 6 情報ボランティア(点訳・ノートテーカー等) 7 活動経験なし

Q1. 最初に、「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」に参加して(全体的に)

1 十分満足できた 2 概ね満足できた 3 あまり満足できなかった 4 全く満足できなかった

\* 3、4の場合は理由をご記入ください。

( )

『裏面に続きます。引続き回答願います。』

**Q2. 第1部 パネルディスカッションについて**

**SQ1. パネルディスカッションはどうでしたでしょうか。**

- 1 十分満足できた 2 概ね満足できた 3 あまり満足できなかった 4 全く満足できなかった

\* 進行・内容等でお気づきの点がありましたらご記入ください。

( )

**SQ2. 時間的にはどうでしたでしょうか。**

- 1 ちょうどよい 2 長すぎる 3 短すぎる

**Q3. 第2部 分科会について**

(参加された分科会 ⇒ 第\_\_分科会)

**SQ1. 参加された分科会はどうでしたでしょうか。**

- 1 十分満足できた 2 概ね満足できた 3 あまり満足できなかった 4 全く満足できなかった

\* 進行・内容等お気づきの点がありましたらご記入ください。

( )

\* 今後、分科会で取り上げたほうが良いテーマ・内容等がありましたらご記入ください。

( )

**SQ2. 時間的にはどうでしたでしょうか。**

- 1 ちょうどよい 2 長すぎる 3 短すぎる

**Q4. 開催時期はどうでしょうか。**

- 1 適当 2 適当ではない (2の場合、適当と思われる時期 ⇒ 月頃)

**Q5. 会場はどうでしたでしょうか。**

- 1 適当 2 適当ではない

2の場合、適当でないと思われる理由をご記入ください

( )

**Q6. 日程はどのくらいが適当でしょうか。**

- 1 半日 2 1日 3 1泊2日 4 その他 ( )

**Q7. 日本学生支援機構が、今後も「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」を継続的に開催することについて**

**SQ1. あなたは、今後もこのような「集い」を続けてほしい、と思いますか。**

- 1 毎年続けてほしい 2 続けてほしいが、毎年実施しなくてもよい

- 3 実施する必要はない 4 その他 ( )

**SQ2. あなたは、今後もこのような「集い」に参加したいと思いますか。**

- 1 ぜひ参加したい 2 できれば(機会があれば)参加したい

- 3 参加したくない 4 その他 ( )

**※ その他ご意見、ご要望、ご感想等ございましたらご記入ください。**

( )

ご協力ありがとうございました。  
気をつけてお帰りください。

## 参加者内訳

◆ 平成18年度「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」出席者内訳  
(人)

	男	女	計
大学・短期大学等教職員	90	50	140
ボランティア関係機関・団体	11	5	16
学 生	22	13	35
合 計	123	68	191

◆ 大学・短期大学等内訳（教職員・学生）

(人)

		男	女	計
国 立	大 学	21	4	25
	高等専門学校	6	0	6
	小 計	27	4	31
公 立	大 学	7	4	11
	小 計	7	4	11
私 立	大 学	69	49	118
	短期大学	9	6	15
	小 計	78	55	133
合 計		112	63	175

◆ 分科会別内訳

(人)

	男 (学生数)	女 (学生数)	計 (学生数)
第1分科会	44 (0)	18 (1)	62 (1)
第2分科会	27 (4)	16 (2)	43 (6)
第3分科会	18 (2)	14 (3)	32 (5)
第4分科会	16 (1)	11 (0)	27 (1)
第5分科会	17 (15)	8 (7)	25 (22)
全体会のみ	1 (0)	1 (0)	2 (0)
合 計	123 (22)	68 (13)	191 (35)

## 参加大学・機関等一覧

(順不同)

### 大学・短期大学・高等専門学校

116校・175名

愛知教育大学	近畿大学豊岡短期大学	帝京大学	福井県立大学
愛知みずほ大学短期大学部	慶應義塾大学	帝塚山大学	福岡大学
青山学院大学	敬和学園大学	東海大学	藤田保健衛生大学
亜細亜大学	高知工科大学	東京音楽大学	文京学院大学
石川県立大学	神戸市外国語大学	東京家政大学	平成国際大学
岩手大学	国際医療福祉大学	東京工科大学	北海道医療大学
宇都宮短期大学	駒沢女子大学	東京女子大学	北海道武蔵女子短期大学
愛媛大学	佐賀大学	東京立正短期大学	北海道薬科大学
桜美林大学	実践女子大学	同志社女子大学	南九州大学
大阪経済大学	淑徳短期大学	東北学院大学	宮崎女子短期大学
大阪芸術大学	上智大学	東北公益文科大学	武蔵工業大学
大阪市立大学	昭和女子大学	東洋英和女学院大学	武蔵大学
学習院大学	女子美術大学	富山福祉短期大学	武蔵野大学
活水女子大学	仁愛女子短期大学	長崎純心大学	明海大学
金沢大学	鈴鹿工業高等専門学校	長野工業高等専門学校	明治学院大学
鎌倉女子大学	駿河台大学	名古屋工業大学	明治大学
カリタス女子短期大学	聖学院大学	名古屋女子大学	名城大学
川崎医療福祉大学	成蹊大学	鳴門教育大学	明星大学
関西大学	清泉女子大学	南山大学	目白大学
神田外語大学	聖隷クリストファー大学	新潟青陵大学	桃山学院大学
畿央大学	洗足学園音楽大学	新潟青陵大学短期大学部	山口大学
木更津工業高等専門学校	高崎健康福祉大学	新潟大学	山梨英和大学
北九州市立大学	高崎健康福祉大学短期大学部	新居浜工業高等専門学校	山梨大学
九州工業大学	高千穂大学	日本社会事業大学	横浜国立大学
九州保健福祉大学	詫間電波工業高等専門学校	日本女子体育大学	横浜薬科大学
京都教育大学	玉川大学	弘前大学	米子工業高等専門学校
京都精華大学	中央大学	広島経済大学	立命館大学
京都ノートルダム女子大学	中京短期大学	広島国際大学	流通科学大学
共立女子大学	筑波大学	フェリス女学院大学	早稲田大学

### ボランティア関係団体等

15団体・16名

(株)富士通総研  
(財)横浜市青少年育成協会  
(社)日本青年奉仕協会  
(特活)NICE(日本国際ワークキャンプセンター)  
NPO法人コミュニティ活動支援センター  
NPO法人当別町青少年活動センターゆうゆう24  
SVnet(ボランティアをする学生を支援するネットワーク)  
国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター

災害救援ボランティア推進委員会  
さわやかちば県民プラザ  
社会福祉法人全国社会福祉協議会  
杉並区教育委員会 宮前図書館  
杉並区教育委員会事務局  
地域情報研究所  
山梨県ボランティア協会